

淨土

昭和十二年五月廿三日第三版印刷
昭和十二年五月廿三日印刷
昭和十二年五月廿三日印刷

第三卷 第五號



五月號

法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 三十錢 (送料六錢)

これぞ光明！ 時代の悩みを一身に背負ひ、精
魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生
活の跡！

現代日本人が擧つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齎らした巨大無双なる聖、我々が祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求めてやまぬ信仰と最も良く合致するものである。

この書には、上人が萬人と共に悩み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう新切丁寧に説かれてある。
読んで得られよ！ 正しい信仰を！

目次

第一 求道生活——第一期求道生活——求道の動機、恩讐の彼方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。二第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。三第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡空上人との接觸。四第四期の求道生活——碩學歴訪の旅。五第五期の求道生活——再び讀書生活へ。

第二 信仰生活——入信時代の新生活——強い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活——山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて来るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆縁を順縁と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

◇ 發行所 法然上人鑽仰會 ◇

法然上人鑽仰會へ御入會下さい

法然上人鑽仰會とは？

法然上人鑽仰會は現代日本の世相の上に元祖大師法然上人の高邁無比なる御人格を高く顯揚し、凡ての日本人が正しい宗教的覺醒の機會に恵まれんことを念願とするものであります。

◇從つて元祖大師の御教へに基いて淨土教の正しい教義を最も平易に、最も明かに發揚するための、種々なる教化的活動を行つております。

雑誌『淨土』をお読み下さい

◇本會では以上の目的の下に、月刊大衆雜誌『淨土』を發行しております。

◇『淨土』は新しい内容を新しい方針の下に編輯し、傳統に輝く正しい宗教を、現代に一番適した形式で發表しておりますから、誰れでもが、興味をもつて讀むことが出来ます。讀んでゐる中に何時か信仰を持たざるを得なくなるのが、雑誌『淨土』の特色であります。

◇新鮮で易しい信仰的讀物は勿論、一般の小説や興味ある讀物まで満載してありますからどなたにおすゝめになつても好感をもつて迎へられております。

御入會の手續きは簡單です

◇本會事務所に御入會の旨を申添へて、一圓御納めになれば、その時から會員として、毎月一回『淨土』の配布を受け、その他種々な特典が與へられます。

◇既に全國に五百近い支部がございますから、御入會の方はその地方の支部へ直接御申込みになれば、支部員として、支部の種々な催しに参加出来ます。

◇その他詳しいことは往復はがきで御問合せ下されば御返事申上ります。

◇御入會御申込みは本誌添付の振替用紙を御利用願ひます。

法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

信 仰 の 糧 に は 本 會 の 書 籍

中村 辨康著 四六版一三〇頁

法然上人の信仰生活 三十錢

中村 辨康著 四六版八〇頁

信 仰 讀 本 二十錢

藤井 實應著 菊半截一五〇頁

法然上人法語抄 三十錢

佐藤 春夫著 特ノート版三〇〇頁

法然上人傳 掬水譚 四圓五十錢
(送料三十三錢)

中村 辨康著 四六版一四〇頁

講 話 一枚起請文 十錢
(送料九錢)

中里 介山著 三六版一三〇頁

法然上人傳 六十錢
(送料六錢)

「淨土特輯號」 菊版一三〇頁

念 佛 讀 本 二〇錢

(送料は各三錢)



考證
讀物

「上人號」の話

松鶴山人(一六)

讀物特輯

名作
講談

五郎甚置物の鷹

桃川若燕(一三)

連載
小説

住蓮と安樂

飯田光明(一四)

五月人形の話

松村文作(一五)

隨筆祖

父

井上春子(一六)

笑話と漫畫

編輯部(一七)

歌壇

與謝野晶子選(一八)

俳壇

太田耳動子選(一九)

小消息
講義

喜びへの飛躍

中村辨康(二〇)

鑽仰運動ニュース

(二一)

編輯後記

(二二)

◇淨

土

第三卷
第五號

五月號
目次◇



◇ 浄土 第三卷 第五號 五月號 目次 ◇

・扉

・目次カット……………鈴木金平

説苑

空

……………真野正順(一五)

信仰
事實談

甦へる死刑囚

……………石井英亮(一五)

特輯 達人に道を聴く

無我無劍の境地

劍道範士

高野佐三郎(一三)

膽を練る修業

角力検査役

花龍平五郎(一五)

塑像偶感

彫塑家

中谷宏運(一九)

通俗方丈記

……………佐藤春夫(一三)

四誓偈
講義

春は萬物に光がある

……………大野法道(一三)

信仰相談

……………中村辨康(一五)

往生とは明るい世界への道

浄土宗 岩井智海談



仙涯禪師の御遺話に、禪師御臨末の際、枕頭に看病的御弟子達が御遺訓を御願ひ申上た處、禪師は早速御快諾に相成られ、筆を取られてさらくとお書きになつたのは

死にたむない、死にたむない

と云ふ文字でありました。

大徳の御遺訓としては餘りにあ

つけない爲め、側近の御遺弟達は禪師に「斯様な事をお書き下さらずと禪師の眞意のあるところを御願ひ申上たところ、左様かと仰せられて、再度筆をお探りになつてしたゝめられた文字は如何に

と見るに

ほんまぢやぞ、ほんまぢやぞ

と書かれてありました。

そのほんまぢやぞといふ文字を拜見して、人は眞に死の巖頭に立つて見れば死にたむないのが眞實である。故に人間は平素眞劍に修養してゐないとうろたへを來すといふ偉大な教訓に感激したといふ

のでありますが、私も病氣になつて、しみじみと此の教訓の有難いことだと體驗したことでありました。

死んで行くといふだけでは心が陰氣で前途は眞暗闇であきらかになりかねる。

徳本上人が「往生とは往いて生ると書いて候、死ぬるといふことには候はず念佛は生きる爲の念佛で死ぬるための念佛ではないと仰せられてゐます。

この往生——即ち明るい世界から明るい世界に往くのだといふ御言葉が有難くしみじみと體驗せられて來ますと、今迄の死ぬるといふ陰氣な氣持は忽ち轉ぜられて前途は光明に輝く氣持がいたします。

誠に私はこの言葉をたびたび

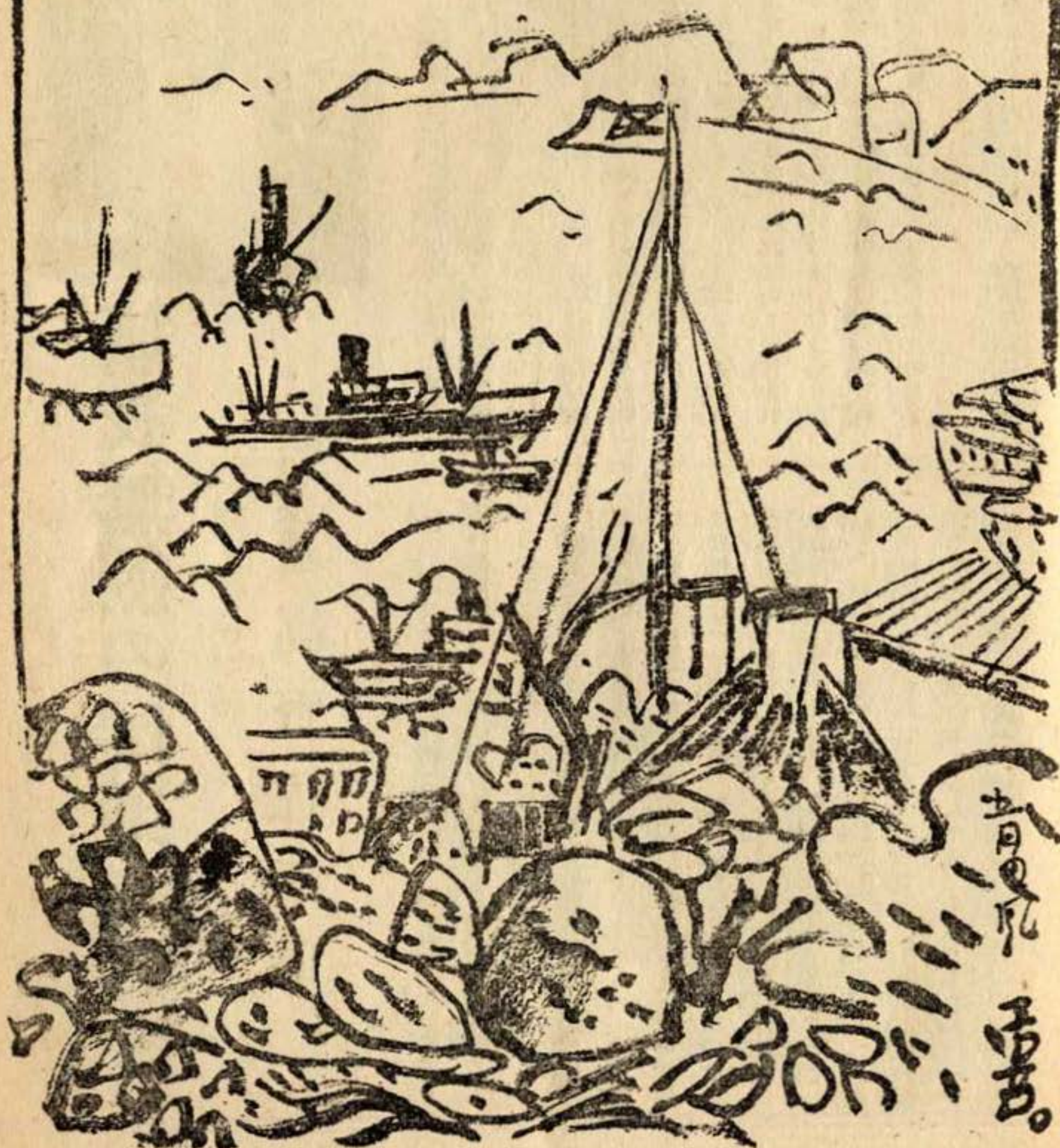
(細井照道師筆記)

浄土

五月號

さへられぬ光もあるを
をしなへて
へたてかほなる
あさかすみかな

法然上人御詠



達 人 に 道 を 聽 く



無 我 無 劍 の 境 地

大日本武道會 範士 高野 佐三郎

私は若い時代に山岡鐵舟先生に師事して、劍道に關んだ事がある。先生は御承知のやうに禪劍一如の崇高な境地に住まれた稀な達人であつたが、先生がこの確信を得られる迄の過程がなかく面白い。先生は始めは竹刀は長い方が便利だと思はれて、四尺六寸もある大竹刀を

人に使はれてゐたが、技が進み、修業が積むにつれて、次第に竹刀を短くされて來た。長い竹刀を使つてゐると、竹刀にばかり氣をとられて、眞劍になれないと氣付かれたからである。そして最後には遂に竹刀はいらないと悟られて無刀流を案出された。竹刀に頼らず、心の劍で相手を威服する、即ち禪劍一如の境地に達せられたのである。

なかく含蓄のある逸話ではあるが、劍道の最後の歸

結はこの境地でなければならぬ。邪を破り正を顯す劍道の眞精神も、この崇高な境地に進んで、始めて生きてくるのである。

劍道はよく殺伐なものであると誤解され易いか、山岡先生の話でも判るやうに、決してさやうなものではない。劍道の修業は適切なる道徳の實修であり、その道場は徳性練磨の道場である。即ち眞摯なる精神、眞劍なる態度を以て、斯道に精進する時は、貴い諸徳性が練磨され涵養されるものがある。劍道は元來忠君愛國の精神に基き、邪を破り正を顯すを目的とし、身心の修養と鍛錬とを目的とするものである。従つてその修業が道徳の實修となるのは當然の事と云ふべきである。また劍道は死生を脱し、恐れ、窮き、疑ひ惑ふの念を去つて、無念無

想、何の不安も動搖もない平靜な明澄な精神を必要とする。夫れには只道場に立つた時ばかりでなく、平生よく爲すべきをなし、爲すべからざる不正邪惡は敢然として之を卻け、公明正大の氣持を失はぬ様にしなければならぬ。

これは私の體驗であるが、試合の時に勝たうと思つて試合に臨むと必ず負ける。構へに勝ちたいと云ふ邪念がある爲に隙が出来るからである。無理に打たうと云ふ欲望もなく、また相手から打たれると云ふ恐怖もなく、それ等の邪念から離れた無念の境に達してこそ、始めて寸分の隙もない立派な構へが出来るのである。だからかう云ふ時には必ず相手を威壓して自然に勝利を得る事が出来る。

従つて單なる技術の巧拙は枝葉の問題で最後の目的ではない。精神の修養と身體の鍛錬こそ、劍道の目的である。身心共に向上させて、立派な愛國の人士を作らうとするのが劍道である。

私は母の胎内にゐる時から七十六歳の今日迄、一生を劍道で送つて來た。だから、身體だけはどうか人に遜色ない剛健なものとする事が出來た。私の祖父は非常に厳格な武人であつたが、母の胎内にゐる時から、私の教

育に心を懈まして、母に試合のある度に、道場に靜座して、竹刀を使ふ氣持になつて試合を見ろと嚴命した。だから私は竹刀の音や氣合等を母の胎内にゐる時から聞いてゐたわけで、劍道から生れて來たのも同然である。生れてからは今日に至る迄、終始一貫して劍道の中に暮して來た。今日でも稽古を休むと、飯がまづく、寢汗をか

比

いて安眠も

出來ない。

若い人を構

手に稽古を

すると、飯

が非常にう

まく、その

上心よく熟

睡する事が

出来る。劍

最後に遂ひに刀は
いらぬと悟つた

道の賜と心から喜んでゐる。

かうして一生劍道に生きて來たから、身體も人と違つて頑健無比である。先日、帝大の醫學部で私の筋肉と骨格とをレントゲン寫眞にとつて後世に残さうと相談を受けて、無理にレントゲンにかけられたが、餘り身體を使

達 人 に 道 を 聽 く

ひすぎたためか、肩と膝の骨が減少してゐた。こんな調子だから年をとつても身體は至つて丈夫、氣持だつて頗る爽快で毎日を元氣よく愉快に送つてゐる。

現在になつて切實に私の胸に浮んで來るのは、勝海舟先生の言葉である。私は若年の折に勝先生に非常に愛されたが、先生は私を見るとよく口癖のやうにかう云はれた。

「日本人は悪い習慣で、人生僅かに五十年と稱して、五十過ぎるともう人生の役割は終つたものと考えて、急に老人じみてお茶とか謡とかで日を過して、世間から逃避してしまふ。丁年になつてから僅かに三十年丈しか國家に奉公出來ない勘定で、馬鹿げきつた事だ。勿體ない話だ。世界を見廻しても、七十以上の人々が國家の第一線に立つて活躍してゐる。人生五十年と云ふのは丁年から數へて五十年と解釋するのが至當だ。お前も今から身體をウント鍛へて、年をとつても元氣で、出來るだけ若い者と交際するようにしろ。」

先生は老人じみた話を心からいやがつた。現在若い者と一語になつて稽古の出來るのも、先生のこの言葉の賜である。どんな若い丈夫な青年にも負けないだけの體力と氣力とを持つてゐるのは、實に先生のお蔭だと、

今日になつてしみじみ考へさせられる。

だが、冒頭にも述べたやうに、劍道は身體の鍛練だけが目的ではない。身體の鍛練と共に精神の修養を最後の目的とする。山岡先生の禪劍一如の境地こそ劍道の最後の歸結であるが、この境地は佛教の無我の三昧に徹せねば到底達せられるものではない。

また今迄述べた所から既に劍道と佛教とは一致すべきものであると感付かれた事と思ふが、無念無想の境とか、死生の超脱とかは、全く佛教の精神と合致したものである。私は常に劍道は佛教の精神を生かすものであると考へてゐると共に、劍道も最後は佛教の精神に則らなければ、其極意を得る事は出來ないと考へてゐる。

今日私はこの信念にたつて劍道を通して佛教の大精神を味つてゐるものである。

高野佐三郎先生は舊武州忍藩の陣屋師範役高野苗正氏の孫同芳三郎氏の長男、文久三年六月二日埼玉縣北足立郡大宮町に生る。幼にして郷儒鹽谷僊に師事し又劍を祖父苗正に學びて一刀流に通ず、後上京して故山岡鐵舟の門に入る。大日本武道會範士にして東京高等師範學校教授、斯界の第一人者である。



膽を練る修業

大日本相撲協會
検査役

花籠平五郎
(元三杉磯)

誰にしても力士を志して故郷を出る時は未來の横綱大關を夢見てゐる、が、その中で本望を達して名を成すものは先づ百人に一人か二百人に一人。力士として出世するのはその位難しいものです。

只、身體が大きく、力量が優れてゐれば、それだけで一人前の力士になれると言ふ譯のものではない。前途に横はつてゐる色々な困難な修業の道を征服して行く辛棒の出来る者でなければ駄目です。

例へば、先づ新弟子となつて地方巡業に行く、その間土地が變り水が變つて、風土病にかゝる者が非常に多い。それで一方では猛烈な稽古を剛みながらも、不斷の節制と言ふことが非常に大切になつて來るのです。これが出来ないでだらしの無いことや不養生をしてゐると必

ず雄途半ばで挫折するやうなことになる。

この稽古と言ふのが生易しいものではないが、これによつて體力、力量を鍛へ上げると共に膽を練つて行くのです。膽を練る、精神を鍛へることが角力道では第一に肝心なことで、それが充分で、土俵にのぼる時の心構へが確り出来るやうになれば力士として一人前とは言へない。自分の實力を十二分に發揮出来る力士と言ふのは、だから日頃熱心に稽古をし、捨身で修業してゐるものです。

何にしる澤山の體格力量共に優れた人間が同じやうに大關、横綱、三役を目指して修業してゐるのだから、この間にあつて本當の大物にならふとするには、普通のことをやつてゐたのでは到底頭を上げることは出来ない。

達人に道を聴く

文字通り拔群の稽古をし、拔群の修業をしなければ先づ駄目です。

新弟子となつてから入幕まで普通五六年から七八年、角力道で横綱、大關と言はれるやうな人は皆このやうな拔群の稽古を齎んでゐる。新弟子當時に矚目された人で案外の成績のものがあるかと思ふと、我々玄人が見て先づ十兩止りかと思はれた人で横綱、大關になつた人は澤山ある。それは皆んな今言つた努力の人です。

現在の玉錦、双葉山、九州山、巴瀧などは全部努力精進の人であつて、自分の實力を十二分に發揮してゐる。これで見ても、修業が積み贅力が備つて始めて自分の實力以上のものを出すことが出来ると言ふことが解る。

だから何ごとにもそうだが、特に角力道は一生修業、それも拔群の修業が肝要と言ふことになるのです。角力道で出世するのは決して偶然ではないのです。

前角力時代の修業

私が角力になつた當時は新弟子が二百七八十人、十六貫以上、五尺三寸あればなれた。ところが今では丁年未満で十九貫以上、五尺五寸なければなれない。修業は一層厳しくなつてゐる譯です。

新弟子から横綱までには本中、序の口、序二段、三段目、二段目(幕下)十枚目、幕の内、三役、横綱と階級がある。この横綱には大關の中で人格技量共に優れたものがあることになつてゐる。

先づ序の口から序二段までは所謂取組、その間は關取衆始め、兄弟子の面倒を一切見てやらなければならぬ。つまり關取衆、兄弟子の女房役です。土俵の上の苦勞ばかりでなく、さう言つた苦勞がまた大變ですが、畢竟これも修業であつてこの位の辛極が出来なければ何をやつても出世は出来ない。この間に先輩及び兄弟子の言ふことを良くきいて、自分の勤めを眞面目にやつて行くものが大成することになるのです。

斯ふ言ふ苦勞をして三段目になれば兄弟子ですから、幾分楽になる。が、その樂になつた時分が一番むづかしい時でその時分の心懸けの如何が出世の別れ目です。と言ふのは、その時分になると身體も力士らしく出来上つて來、格好も付いて來る。従つて色々な方面からの誘惑の手が延びて來ると言ふ譯で、つひそれに負けて仕舞ふと切角今迄の努力が水泡に歸して仕舞ふ。こゝ言ふ例が良くある。だからこの時分が一番むづかしいので、丁度人生で開運の波に乗りかけた時代が一番難しいのと同様

です。

勝負の氣合

今まで述べて来た角力道の修業は結局、國技館の土俵の上で花を咲かせ實を結ばせるためです。本場所は大な試験場です。だから土俵に臨む眞剣さ、緊張の凄じさは當然で、言葉通り命懸けの一番です。

さて、土俵に登つたら人を呑む氣概、精神を統一し、力量を十二分に發揮して、戦ふだけ戦ふ闘志が出来てお

比

らなければ

ならない。

それが思ふ

やうに行か

ない場合に

失敗する。

尤も自分だ

けがさう言

ふ氣概を以

て臨む譯で

一面から云へば小供に還へる修業



はない、相手も充分な闘志を以て臨んでゐるのだから勝つとばかりは限つてゐないが、結局最後の勝利を占める

ものはこの闘志です。ところが、練習不足の者、修業の足りないものにはどうしてもこの闘志が出て来ない。結局平生の心構へ、修業の程度が物を言ふのです。

本場所前になれば地方でうんと鍛えて来た身體をこゝで確り調へるやうにする。だから本場所直前には、平生のやうに猛練習をする人もあるが、大概は身體の調子を調へ、元氣を養ひ、精神力を強めるやうにする。そして土俵を元氣一つばいに勤める。こんな時に俗事に思はされたり、餘計な心配事があると、力量はありながらも心の統一が失はれて失敗する。

土俵に登る前には食事もあり進まない様になり、平生は快活な男もあまり口數を利かないやうになる。これは弱氣からではなく、この位に緊張して仕舞ふのです。良く『土俵が小さく見える』と言ふが、それは本當でこの位緊張してゐなければ勝てるものではない。平生の稽古角力のやうな氣でぼんやり土俵へ上つたら必ず負ける。

剣道や柔道でも『目が見えなくなる。』と言ふことを言ふが、練習してゐるものならかう言ふことはない。また充分に緊張して精神統一の出来てゐるものは出やうと思つたら、どん／＼出て行ける。相手が一步出る中に、こ

達人に道を聴く

つちが二歩出ると言ふ具合で勝味が強くなる。これが習練の如何によることで、俗に『士俵度胸』と言ふ。『士俵度胸』が勝利の鍵であると言ふのは長い修業の上のことであつて修業しないで出る譯のものではない。

子供に還る修業

精神の統一と言ふことを言つたが、これは修業の結果を待たなければならぬと共に、俗事の思ひや、くだらぬ心配事を避けるやうにしなければならぬ。また打算的な氣持などがあると、どうしても弱くなる。心が亂れるからです。物質的に淡泊でくつたくなひ氣持であなければならぬし、またさうでなければ修業が積んだとは言へない。だから角力道の修業は一面から言へば小供に歸る、無邪氣な心になる修業です。佛教では無我と言ふさうですが、そんな氣持です。法然上人の仰つた還愚、それに似通つたものがあるのでせう。

斯様に角力の道は傍で見ると程樂ではない。口では言ひ盡せないやうな修業をして、土俵の上で花を咲かせ實を結ばせる。修業をする本人が苦勞するばかりではない、新弟子から師匠の苦勞も大變なものです。が、その蔭になつてゐる師匠の家内の苦勞が並大抵のものではない。

多ぜいの弟子をまるで自分の子の様に面倒を見てゐる。先きの友綱さんの家内お千代さん、出羽海部屋、高砂部屋、立浪部屋其他大部屋から小部屋に至る迄の御家内の苦勞と言ふものは傍から見ても涙ぐましいものがある。かう言ふ家族制度の下で師匠は親身になつて弟子を育て上げ、弟子は師匠先輩の言ふことを忠實に守つて、始めて立派な力士が育て上げられるのであつて、現在の部屋制度は角力道發展のために缺く可からざるものです。

角力道の日本精神

角力は元來時間で制限さるべきものではないのです。相方の氣合が熟するまでは立上れないのが當然で、一般社會の人でも重要な事はよく熟考した上で始めるでせう。柔道でも剣道でもさうですが、角力にしても相手の長所短所を確りと見抜いて、氣合の合つたところで五分五分の男同志が正々堂々と戦ふところに妙味があるので。だから、これは日本固有の精神の現れです。立合の長いと言ふ非難はこの點から見れば當らないのです。要するに角力道は一生の修業、師匠先輩の教へを良く守り、精神を鍛へ、勝つても負けても己れを向上せしむる心懸けを忘れない日本的な競技なのです。

塑 造 偶 感

彫 刻 家 中 谷 宏 運

私は彫刻家として世に出てかれ二十年になる。その間に製造による肖像を大分製作してゐるが、常に最も感じてゐることは、日本では、製造に對する理解といふか、鑑賞力といふか、さういふものが他の藝術品に比べると一般に一段と劣つてゐるのではないかといふことである。製作する肖像の多くは依頼されて作るのが普通であり、依頼者としてはその肖像に藝術よりも寫眞を要求するのが殆ど全てなので、藝術家たる彫刻家としてはその無理解がいちいち腹にこたえるのである。

展覽會に出品する作品に對してはかういふ無理解が反映しない。何故なら、展覽會に来るほどの人はある程度まで藝術の分る人であり、また少くとも分つた風を装ふ人か、さまなければ始めから分らないと決めてゐる人だ

からである。ところが肖像を直接に依頼する人は製造の藝術的觀方を識らず、また實際それに藝術家としてよりも、記念品としての功利的要求をもつてゐるのが大部分だから、その一般的無理解が如實に身にしみて感じられるのである。この無理解は當然製作者の藝術的良心と矛盾する。その矛盾が製作者を常に悩ましてゐるのである。彫刻の觀方を知らぬ人にとつて、肖像はたゞ似てゐればよい。……肖像が似なければならぬのはいふまでもないことなのだが、その人にとつて、それは似てゐても分らないのだといった方がいゝだらう。出来あがつたものを、「どうです」といつて依頼者にみせる。「どうも似てゐませんなあ」といふのに「いや似てゐますよ」と重ねていつてはみるものゝ、どうしてそれが似てゐるかとい

達人に道を聴く

ふことは理屈では説明できぬことなので、結局それは水掛論に終つてしまふ。こんな時、製作者としては實に情なく齒がゆい思をさせられるのであるが、それは結局、その依頼者に藝術的感覚が全然缺けてゐる場合は問題にならないが、一般に彫塑といふものに對する眼が養はれてゐないことに困る場合が多いのである。その證據に、依頼者が似てゐないと我張つてゐるその肖像を寫眞に撮つてみせて、「なるほど」と肯かせることがよくあるのだ。こんなのは寫眞をみる眼ほど彫塑をみる眼が養はれてゐないといふより他仕方がないのである。

ある顔が寫眞的に似るのと、彫塑的に似るのと、繪畫的に似るのとでは、似方が夫々違はねばならぬのである。

この邊に藝術の妙を探る一つの手がかりがある。

近頃立體寫眞といふものが發達して、恐らく本物と寸分違はぬ顔が出来ると思ふが、さうだといつて、そのことは決して塑造家の領分が侵されたことにはならない。普通立體寫眞をもつて彫塑の代用とすることはできない。普通の寫眞が油繪の肖像の代用物にならぬと同様である。

日本に塑造が行はれ出してから年月が浅いのであるから、この一般的無理解も無理はないと思ふが、塑造は塑造である。たゞ、この上は彫塑家の忍耐強い努力で、塑

造といふものをわれわれの生活に親しみあるものになるのを俟つほかないのである。

以上は塑造製作者の鑑賞者に對する注文であるが、また、肖像になる人にも注文がある。

どうしても肖像にならない顔がある。さういふ顔は、つまり、作家に製作欲を起させない顔である。分り易くいへば印象の薄い顔といはうか。これを別の方面からいへば、歴史上偉人と決つた人の肖像は製作し易く、また必ず似るものなのである。それは必ずしも鼻が大きいとか口が大きいとかいふ顔の製作の特徴のためばかりではない。口が特別大きいといふことは眼にはつくが、それだけでは何ら作家の藝術的琴線を聳つものではない。結局、作家を動かすものは、その衆に勝れた徳であらうと思ふ。この徳のない人の肖像は、その顔にどんな特徴があらうと、不思議に似ないのだ。いや、似ないといつては誤弊がある。つまり藝術品にならないのだ。

同じ意味で、よく銅像や肖像になりたがり、またしたがるのは多く名士といはれる人だが、世の名士といはれる者は、必しも徳ある人と限らないので彫塑家の側からいへば、せれば、どうしても銅像にならない名士が大へん多いわけだ。従つて銅像といはれない銅像が随分そのへん

に立つてゐるのではないかと思ふ。その責任は、強ち作の不出來によるばかりでなく、つまり作者の側にあるばかりでなく、作られる所謂名士の側にも大いにあるのである。もし、都市の美觀を整へるのに本當に藝術的良心を働かせたら、今までこれ見よがしに立つてゐる銅像なるもの的大半は取り拂はれねばならないだらう。そして、この美的觀點からなされた撰擇はとりも直さず本當の意味の偉人の撰擇の基準となるだらう。

もちろん彫塑家は偉人の銅像又は肖像ばかり製作してゐるのではない。偉人でない人の肖像でも強く作家の藝術的衝動に訴へる場合がある。例へば、數年前のこと、ある職工團に頼まれてその人達の職長である人の肖像を作つたことがある。その人に會つてみると、一市井人ではあるが、立派な見識と徳を備えてみえ、また依頼者たる職工の人達にも心からその職長を敬慕してゐる様が見られ、いろいろな條件がびたりと作家たる私の心を捉へまことに心よく製作することができたのであつた。

これと反對の場合がある。例へば、その門下から相當立派な弟子を出した師匠でありながら、どういふものかその弟子達から心からの敬愛を受け得ない人があつた。併し經歷は相當な人なので、弟子達で銅像建設といふこ

とになつたのだが、結局は單なる義理上の企てなので、作者にもその氣持が反映して、一生懸命その製作に従事し得ないことがあるのだ。

要するに、一つの肖像が作られる場合へこれは塑造に限らないと思ふが、その作られる對象と、それが依頼される動機などが何か作家の心を打たなければ佳い作品が生まれやうはないのである。また、作家は作家で、その對象の中に例へば偉人の銅像なら、その人の功績ばかりでなくその歴史的環境までもすつかり呑み込んでその中に融け込まなければならぬのである。その意味で、芝の青松寺境内にある爆彈三勇士の像の如き、これは似る似ないは問題でないが、たゞ爆彈を抱えてつつ立つてゐるだけで、何ら當時の悲壯な氣魄を觀る者に仕へない愚作であると思ふ。前にも述べたが、これら記念像でも、たゞその格好をしてゐればいゝのではない。後世の人がそれを見て、「あゝ爆彈三勇士といふものがあつたんだな」と思ふだけでは困るのである。一見、直に壯烈な戰場を眼前に偲ばしめ、當時の歴史を如實に想起せしめるほどの一種の氣魄を感じしめるものでありたい。歴史上の知識を具象的に表現してみせるものは藝術の力による以外にないのである。



春は萬物に光がある

—「四誓偈」講義—「その四」

大野 法 道

(四) 離欲と深き正念と

淨慧とにて梵行を修め

無上道を志求して

諸の天人の師とならん

十一、行き詰らない生活

今までの三偈で、四誓の中の三誓が終つたので、こゝへ第四誓が來べきであるが、實は第四誓は最後の一偈に廻され、この第四偈より第十偈の半までは、求むべき佛の徳が擧げられるのである。その中、この第四偈は、佛の徳の要點を簡單に言ひあらはしたのである。

本願の成就を誓ふ途中に、佛の徳が擧げられるのは、菩薩

が、佛の徳をわが身に行つてゆく所に、本願が成り立つのであるから、菩薩の心から片時も離れないものは、佛の徳だからである。

佛とは何かといふ問題は、何千年もの昔から、絶えず考へられたことで、種々な解答が出て居るのであるが、こゝでは、行き詰らない生活に生きぬくこそ佛であるとし、それを佛の徳の要としたのである。

行き詰らない生活のことを、經文には「離欲と深き正念と、淨慧とにて梵行を修め、無上道を志求する」と説いてある。

こゝに「離欲」とは、自分の我を張る我欲や、慾の深い貪りの利欲を離れることである。我を突つ張つて傍若無人で、他人の迷惑を何とも思はなかつたり、心の中がたゞ利欲で一パイになつてゐるやうなことでは、その内に行き詰つてしまひに定ま

つてゐる。

私の金魚鉢には、和金と琉金が四ひきほど泳いでゐる。適度の量を見計らつて餌を投げてやると、それが沈んでゆく途中に、中でも一等大きい全身の赤いのが、遑早くやつて来てバクリと吞んでしまうので、他の者どもには食物が當らぬことが多かつた。赤の欲張り奴と思つてゐたのだつたが、ある日子供が、金魚が一びき死んでゐると知らせたので、行つてみると、それは欲張りの赤だつた。やはり、我欲と利欲で行き詰つたのである。

しかし前にも述べたやうに、欲はもと人間に生えぬきのものであるから、誤れる欲は離れねばならぬが、本當の人間の道を行きたいといふ正しい欲は、大いに研ぎ出すべきである。

小さい泡のやうな慾に眼を呉れて、大きい本物を取りにがすほど、つまらぬことはない。

「深き正念」は、人生の道を誤りなく見定めることである。

この頃は、世の中が複雑になり、急速に變るやうになつて來たから、人間の神経が尖つて、眼先の物にばかり氣を取られ、利口にまはることばかりを考へて、落付いて腹を据ること忘れがちであるが、それでは變つた繪の出でくる廻り燈籠に打興じてゐるやうなもので、骨のない人間になつてしまふ。

但し腹を据ると言つても、人生の道を見誤つて、偏つた獨り

よがりの孤立では、しかたがない。また病氣を治してやると言はれて、何でもいゝから治りさへすればと、その道に入り込んだりするやうな、言ひ寄つてくる甘い言葉に心を奪はれるやうなのは、あまり考へが無さすぎる。もつと「深く」人生を見て、偽善なき本當の、眞實なる道に腹を据ねばならない。

「淨慧」とは、正しい判斷を以て、種々な場合に處してゆくことである。人生の正道を見定める必要は前に言つた通りであるが、それが小さく狭く固まつてしまつて、動きのとれぬものであつてはならない。絶えず起つてくる、人事百般の場面に應じて應用されて行くべきで、そこに廣い天地に呼吸する人生の樂しさがあるのである。

それがためには、ともすれば陥りやすい心の曇りを拂つて、常に正しい判斷を失はないやうにしなければならぬ。

利慾に囚はれず、正しい道を見定めた信念があり、しかもその日／＼の種々な事件の中に生きてゆく生活。それが「梵行を修める」ことである。

こゝに言ふ「梵」とは、清淨無垢といふ意味である。已上の三つの根から出たものでさへあれば、それは人間の尊嚴なる本性の噴き出した姿であるから、皆梵行であり、そこに人間を修行する道が成り立つのである。

人間修行の完成が「無上道」であり、法藏菩薩はそれを成就

して「天人の師と爲らん」ことを求められるのである。「天」といふのは古代の印度では、天上に梵天、帝釋天、四天王などいふやうな、種々の神があるばかりでなく、それらに従屬してゐる大勢の天人といふものが居ると思つてゐたので、それらをすべて天といひ、地上の人間とともに天人も佛を師と仰ぐから、佛のことを「天人の師」と呼んだのである。

(五) 神力、大光を演べて

普く無際(むがい)の土を照し

三垢(さんこう)の冥(みやう)を消除して

廣く衆(しゆ)の危難(きなん)を濟(さ)ひ

十二、春は萬物に光がある

この第五・六の二偈は、特に佛の教化の徳が擧げられるのである。

一陽來復して春になれば、永らく寒風にさらされてゐた草木は、さも嬉しげに、思ひ／＼の色や形で芽を出し、芯が伸び蕾をつけてくる。永らくの冬眠から眼をさました蟲たちは、ほゝゑましげに、わが世の春ぞと云はんばかり、駆けだしてくる。空飛ぶ鳥は啼き聲にへヴィをかけるし、川の流ればわざ／＼水

平面からもち上つて、變調行進曲を奏しながら決定してゆく。外へ出てよく見ると、それも道理。ありとあらゆる萬物は悉く不思議な光を含んでゐる。

それは太陽の光を受けて反射してゐるのではなく、まつたく一種の發光體になつてゐるらしい。夕闇の空にもくつきりと浮び出てゐる楓の若葉。曇つた日にもあざやかに、照り榮えてゐるチューリップの花びら。

それらは、科學者が思ひもよらぬ或る光を、自分で所有てゐるに違ひない。

萬物の生氣を、一身に引き受けたかに見える新芽の枝が、勢よく伸びてゆくのは、この内に含む光の力である。

人の身に、心に、光を興へて、伸び／＼と育てゆく力が佛である。

更に、また春が、際りなく天地に満ちみつるやうに、佛の光は、いかなる衆生にも及んでゐるのであり、身分や、境遇や、事情や、場合の差別を越えて平等であるから、一たびこの光に氣付くところ、貪りと瞋りと癡かさとの、「三垢の冥」に閉ざされてゐたわが身が明るくなり、今まで暗やみの中で揉み合つてゐた爲に蒙つた、數しれぬ災害「厄難」から濟はれて、熙々たる青陽の麗日の下、ひろ／＼とした大道を闊歩するよろこびが味はれるであらう。



信仰
事實談

甦へる死刑囚

兄弟の殺人犯が共に信仰に入つた話

館林善導寺

石井英亮

私が今の千葉刑務所、當時の千葉監獄に教誡師として勤めたのが日清戦争直後の明治廿九年でした。教誡師の仕事と云ふのが、毎日の出監、入監の教誡、處罰者教誡、死刑教誡一週一回五百人程を集めてやる總集教誡など、その他に書籍差入、面會立合など仲々仕事が多く骨の折れるものでした。

然し、犯した罪の報ひとは云へ、社會とは全く、離れた監獄に入れられた不幸な人々のために大安心を與へ、且つ社會的に歸られようとする人々を新しい生命の境地に導くと云ふことは三界の導師たる僧侶の本懐であると思つて、この仕事に出来るだけ努力しており

ました。

丁度、私が教誡師となつた始めのことで、二人の兄弟の死刑囚が入獄しておつて、第一審で兩人共死刑の宣告を受け、控訴中でした。兄弟で死刑を受けると云ふのは餘り類の無いことだが、これは實の兄弟で、兄は須田仙藏、弟を同姓磯松と云つて、殺人共犯でした。

この兄弟は關西のもので、元は鹽の仲間、養蠶の教師などをやつており、教育も相當にあり、兄弟仲は非常に良く、弟は兄の云ふまゝに働いておつたものらしい。ところが、兩人が千葉に參つた時に、在方のある豪家の息子と惡意になつた。この息子と云ふのが養

子で、心の良くない男と見えて兼々養家の財産に目を付けておつた。で或る時、この須田兄弟を呼んで秘かに、

『どうも親爺が目の上の瘤だから、君等二人でひと思ひに殺つて仕舞つて呉れないか。』

若し二人で殺つてくれるなら、私もそれだけのことはしよう。二人が生涯安樂に暮せるだけのことはしようぢやないか。

と云ふ話をした。えらい悪黨で、不埒な相談を持かけたものだが、兄弟も慙に目がくらんで、兎やかく云つてゐる中にこの相談に乗つて仕舞つた。

それで、何ういふ手段を用ひたものか、このどら息子の養父、豪家の主人を自分達の手に掛けて殺害した。だが、かう云ふ惨虐な悪事を天が見逃して置く筈がない。頭等事件後十日程で兄弟共法網にかゝつて、裁判の結果罪狀を自白したので、兄弟共死刑の宣告を受けて仕舞つた。が、これは自分の意志から出たことではない、人に頼まれてやつたことだから、お上のお目こぼしを願つて死刑だけは

逃れ度いと云ふ氣持ちがあつたのでせう、直ぐに控訴いたしました。

私が須田兄弟に逢つたのはその當時で、私は兄弟の話を聞きますと直ぐに兄仙藏の監房を訪れまして、

『あんた達は飛んだ心得違ひをしてしまつたものだ。控訴をしてゐるさうだが、兎に角殺人は事實なのであつて、これは否定出来んのだから、一等を減ぜられたにもせよ、無期または長期の刑は脱れん。斯うなつた上は良く獄則を守つて、一刻も早く正しい人生に醒めねばならぬ。人間に興へられた命はこの短い、苦難にみちた生活の外に、永遠に光明の存在もあるのだから、それにめざめるやうに心懸けて欲しいものだ。』

と斯う申しました。始めの中は仲々應ずる氣色も見えなかつたが、こつちも毎日熱心に續けて行く中に段々先方でも私の氣持が解つて来るやうになつた。心が通じたのです。そこで先づ仙藏に

『佛教はお釋迦様が、普く十方の衆生を濟

『上人』號物語

松鶴 山人

(1) 『上人』の意味

昔から一派の僧に付いて『上人』と云ふ稱號がある。之れは淨土宗などで多く云はれるが、一般に天台系統の寺で云ふ言葉である。即ち眞宗日蓮宗、時宗などでも云ふ。親鸞上人日蓮上人は誰れでも知つてゐるが、遊行上人、なぞとも云ふ。藤澤の遊行寺は時宗である。

此の『上人』と云ふのは一體どう云ふ意味であらうか調べて見るのも無駄ではあるまい。

之れは始めは稱號ではなくて、只『上人』『上等の人』と云ふ意味であつたのである。

即ち『圓覺要覽』に

『内に徳智あり。外に勝行あり。人の上に在るを上人と云ふ』

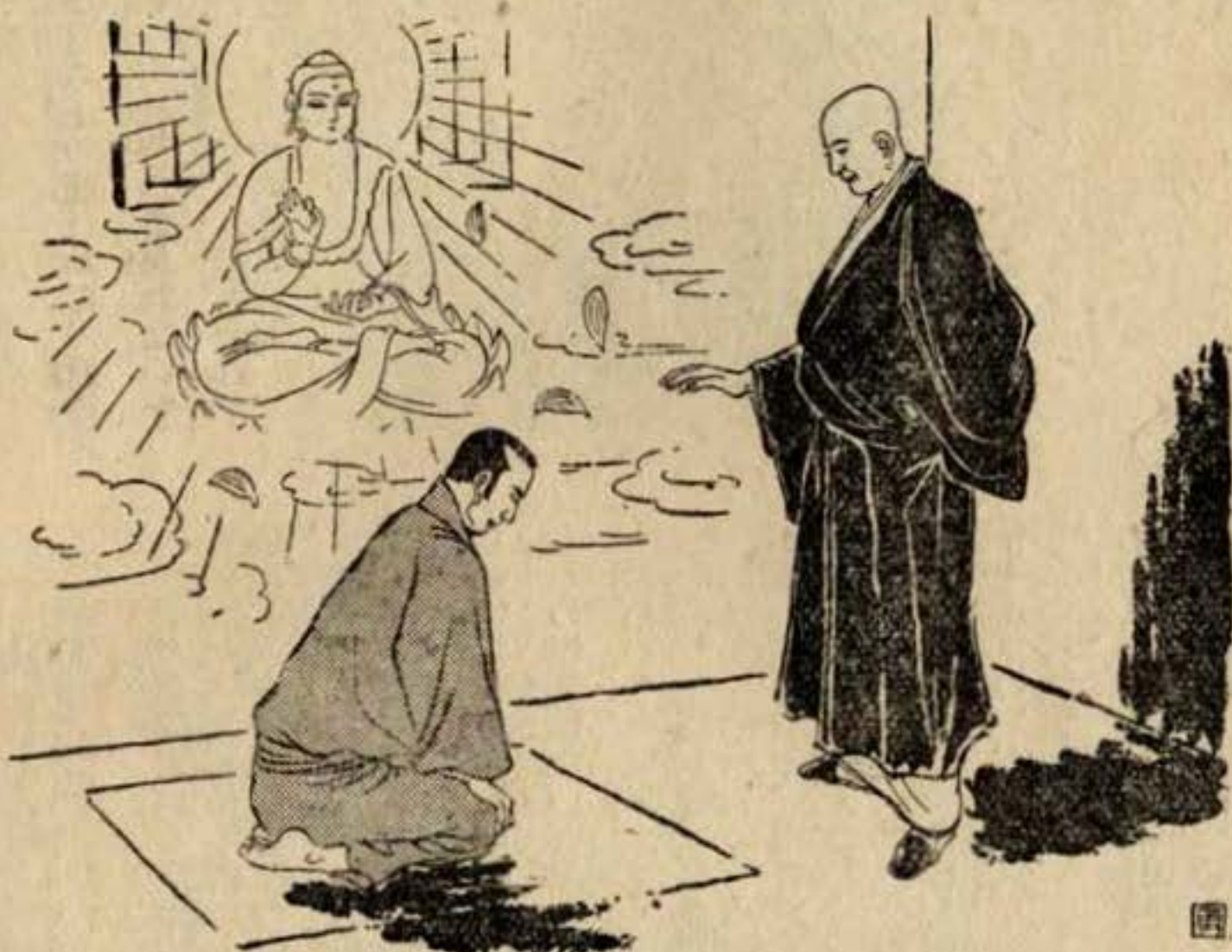
度し給ふ爲めにおたてになつたもので、罪深
く、弱い我々人間は、このみ佛の御手にお頼

と申しますと。

『それでは念佛を唱へませう。』

圖

り申す他には、本當に正しい路を歩んで彼土に生れる術がないのである。その佛法にも數多くあるが何人にも直ぐに入る事が出来、何人も誠心を以つてすれば必ず往生の本願を達し得るものは淨土宗であり、念佛宗である。あんな方も疑はずに阿彌陀様にお頼り申しなさい。念佛申しなさい。きつと現在在の境地を打ち開いて光明に接することが出来るから。』



囚が人間らしい氣持ちに立歸つて稱名を唱へ、一心に勤めてゐるのを見まして私も大變

と云ふ。そこで、弟の磯松の監房へ行きまして、兄に斯う云ふ話をしたら、早速念佛を申すと云ふことだが、あんたはどうだと訊ねると「兄がやりますならば、私も念佛申し度う御座います。」と云ふ。その日から兄弟が揃つて念佛を申すやうになつた。

鬼か獸のやうに思はれてゐた死刑

とある。つまり人の上に立つて智徳のある人は誰れでも『上人』なのである。之れが僧に限らぬわけは『十誦律』に『人間に四種類あり。一を龜人(粗末な人)、二を濁人、三を中間人、四を上人となす』と云つて、粗末な人と濁惡な人と、普通人と上等の人間とに別けてゐる。以つて『上人』の意味が好く判る。尙『律』には印度の瓶沙王が佛弟子を呼んで『上人』と云つた實例があつて、之れは『上人』の語が僧に擬せられた初例かもしれない。だが此の頃はまだ、僧にのみ用ひられたのではない。即ち『摩訶般若經』に曰く『何故に上人と名付くるや。佛の云はく、若し一心に阿耨三菩提を行じて、心散亂せずんば是を上人と名付く云々』とある。非常に實踐的な解釋では『増一經』に『夫れ人の世に處するや、即ち過あり。能く自づから改むるものを上人と名付く』と云ふのだから、改過遷善に吝かならざるものは皆上人である。

張合が出来た。及ばず乍ら須田兄弟を導いて本願を遂げさせたいものだ、なほも毎日熱心に兩人に説いておりました。

或る日兄の仙藏が

「教誡師様、貴方のお蔭で毎日かうして念佛を唱へさせて頂き、どうやら心も落付いて参つたやうで御座います。就きましては、念佛を申しておりまして、目的が無いと何か張合の無いやうな氣が致しますが。」と云ふので、

「それでは目的を上げやう。善光寺の如来様の御影を取付いであげるから、それを部屋へ懸けておきなさい。」

と早速典獄の許可を得て、善光寺如来の御影を仙藏の監房内へ張付け、弟磯松にこのことを話すと私にも貸して頂きたいと云ふので、これにも張付けさせました。私は二人のために別々に歌を詠んで、それを書付けてや

つた。

兄は仙藏ですから

雲かゝる高峰に住める山人も

弟は磯松ですから

磯の松吹く汐風も絶へはて、

心にたちし浪もやみけり

それから兄弟は一層念佛を唱み、日に三千遍以上も申すやうになつた。

また暫くたつてから仙藏が

「千葉縣の方々の御世話でかうして毎日暮らせて頂いておるのに、何にも仕事をせずにおるのは勿體ないと思ひます。どうか何んでも仕事をさせて頂き度う御座います。」

と云ふ。未決の者には仕事はさせないので、願へば出来る。そこで水引にするこよりを作る仕事を當がつた。弟もやると云ふ。兄弟は大いに喜んで念佛を唱へながら、仕事に精を出すので、毎日大きな束を五束を作るやうになつた。

斯様に始めの中は凶暴で手も付けられなかつた兄弟が、念佛を申すやうになつてから、次第に落付きを取りもどし、打つて變つた人間らしい氣持になり、唯日を暮してゐるのは

(2) 居士上人

佛教も始めの内は一方に在家の大悟者と云ふものが澤山居た爲めに、「上人」の語を僧に専有出来ず、維摩居士の如き俗人を「上人」と云つた例は「維摩經」の中にある。即ち「問疾品」の中に文珠が居士の事を「上人」も云つた事が出てゐる。

「文珠師利、佛に申さく、世尊よ。彼の上人には酬對し難し云々」

と。處が世が下るに連れて、在家の俗人を前述の「中間人」と見る結果、自然に僧のみに、此の語が用ひられる様になつて、漸く、一つの美稱から、特殊稱號に轉じつゝあつたのである。

(3) 上人號の元祖

明白なる稱號となつたのは日本での事であらう。日本で、「上人」を稱號とした元祖は空也上人だと云はれる。「元亨釋書」や「東國高僧傳」を見ると、京都で彼れが市中で念佛を唱へたので彼の事を市人が

「市上人」

勿體ないから、仕事を仕度いと云ふ。大變な變りやうです。

「あんた達も控訴をしてゐるさうだが、先づ一等を減ぜられると云ふのは難かしいと思はねばならぬ。これも前世の種撒きで誠に止むを得ないことだ。然しあんた方も念佛申



し、み佛の力にすぎるやうになつて心の持ち方が大變に變つて來た。が念佛の修業は至誠、深心、回向發願心、懈怠なく剛まねばならぬものだから、今後とも一層勤めてその場に望んで立派に覺悟が出來てゐるやうにしなければならぬ。」と申して置きました。

斯様に、私が初めて須田仙藏、磯松の兄弟に逢つてから六ヶ月、色々と話し合ふことも出來、彼等の心の動きをまざくと手に取るやうに見ることが出來た譯です。「惡人またすくはる。」惡人が善人に立歸つて行く。安心を得て犯した罪の深さを悟り、贖ひを求め心を生じ、死の恐怖から解放されて彼の土に往生せん強い確信を生んで來る。私はこゝ目のあたりに阿彌陀様の無量の大慈悲を見て今さら乍ら信仰の尊さ、有難さに強く心を聚れたのです。(眞實は石井英亮氏)

その中、豫想してゐたやうに第二審でも兩人に對して死刑と云ふ判決が下された。

丁度その年の九月八日、私が一日の教誡を終へて、晚事務所へ歸つて來ると、そこへ

「須田仙藏、須田磯松に對し、明九日午前九時死刑執行す」

と云ふ命令が來た。で、私は早速それぞれ兄弟の監房を訪れて

「今、あんた方に對する命令が來ておつた。」

と呼んだとある。即ち此の頃、已でに「上人」とは「聖僧」と云ふ意味に使用されたのが判る。頃は天慶元年で、平將門なぞと同じ時代である。

處がそれから程經て、空也が長谷寺に參詣の歸りに山賊に出會つた。その時に彼が一心に念佛して止まなかつたので、賊は

「それなら之れは空也上人である」

と思つて、惡意を捨て、去つたと云ふ。假りに此の話をその儘に受取るとすると、「市上人」と云ふ綽名の「市」が「空也」と云ふ僧名に代つた爲めに、いつかしらぬ間に稱號に轉化したのである。「市」上人と云ふ名が空也と不可分になつた結果、「上人」が「聖僧」と云ふ普通名詞でなくなつて、空也其人の綽名になつてゐた處へ、「市」が僧名の「空也」に入代つた爲めに綽名は斷然、稱號に轉化し始めたのである。兎に角、「空也上人」と云ふ稱號は世人が彼に與へた名で、空也が自づから冒稱した稱號ではないらしい。

「諸門跡譜」に空也の事を書いて曰く、「上人、始めは常康親王の男にして、仁明帝の孫也。日域上人は是れが始め也」

とある。日域上人は是れが始め也

覺悟は出来てゐるか、念佛はどうだ。」と訊ねた。

「はい、どうも有難う御座いました。他人様を害め悪事を働いたからは斯様な報ひを受けるのは當然であります。この上は立派に往生の本意をとげて、未來に於てこの贖ひを致したいと存じます。教誡師様にも色々とお教を頂き、皆様に色々とお世話になりました。何とも御禮の申上げ様ありません。」と仲々立派な返事です。

翌朝の八時半に死刑執行の場所に仙藏兄弟は引出されて來た。兩側には典獄を始め、看守、押廷ずらりと居並んでゐる。その間を惡びれる様子もなく進んで來る。典獄が

「大臣の命令により死刑を執行する。」

と讀上げると、兄の仙藏が

「有難う御座います。必ず未來に於てこの贖ひを致したいと存じます。皆様に色々とお教を見て頂きまして、もう何も心残りはありません。就きましては最後に一つ御願ひが御座います。紋首臺に昇りましてから、

合掌によつて念佛數百邊を唱へさせて頂き度ふ御座います。勝手では御座いますが、その間の御裕餘を願上します。また教誡師様に申上げますが、執行になりました、私の合掌の手が右に伏さつておりましたら、本意を遂げたものと思召し下さい。」

そこで兄の仙藏が紋首臺にのぼつて、望みの如く念佛三百遍以上唱へて、更に

有難や須田の蓮の花さいて

眞如の月を拜むうれしさ

と辭世の歌を讀むと、同時にばつたりやられました。次いで弟の磯松が聲高らかに

袖が浦露ときゆるもうれしけれ

彌陀のみ國に行くと思へば

と唱へてこれも大往生を遂げました。兩人共に合掌の手を右に伏せて本意を遂げたことを示しておりました。

○

これは私の布教中最も感激した話の一つですが、これが化導の一助ともなれば幸いです。

とあつて、これは信憑す可き文献だと思ふ。空也より前に「上人」をその名の一部としたものはゐなかつたらしいのは、前述の「市上人」からの轉化によつて判る。

(4) 禪宗の上人

其の後比叡山延曆寺が盛んに「上人」と號した事は人の好く知る處であるが、淨土、法華、時宗等でも皆之れを稱號とする様になつたが、それは多く、一寺を持つてゐる僧に限られたものである。併し當時禪宗でも稀に「上人」と云つたもので、その實例が相當ある。

即ち『帝王編年記』の伏見帝の項に「永仁六年、圓覺寺の開山無學上人を佛光禪師と云ふ」

とある。之れは『編年記』の著者が云つたのか、當時云つたのか知らぬが、圓覺寺の開山を「上人」と云ふのは面白い。外にも例がある。即ち『倭訓栞』を見ると、「上人」の項に

「伊勢上人は禪家にして紫衣を着る云々」と云ふ記事が見える。(つゞく)

短歌

與謝野晶子選

静岡 坂倉 正造

富士の嶺の雪さへ花のこころちして
霞める空に雲雀啼くかな

(評) 晴れ渡りたる春の駿河路ののどけ
さに富士の嶺高美を添へて、點綴たる中
に雲を正さしむ

鹿兒島 藤崎 耕我

假りの世のかりの身なりとおろそ
かにわれを思はじみ佛の子ぞ

(評) 佛子の自重心またかくの如くなる
べし、眞率の氣一首に溢れたり

徳島 神原 梅

み佛の光りさし添ふ吾れなれば迷
ふことなし明暗の境

(評) 信念に徹したる人の大いなる自信
仄見えてよろし

大阪 小山 文二

おほらかに光放ちて出づる日を讀
へぬはなしこのあめつちに

恙なく今日にあひぬと手を合せ日
の出にむかふわが心かな

和歌山 白枝 寛

激しかる苦行にやせしともどちの
なほひるまざる心よきかな

ひさびさに語りあへどもこの友の
深き憂にふれまじと云ふ

會津 齋藤 華舟

限りなき望の中にけふもまた一つ
成したる嬉しさに生く

年毎にわづかなれどもわが家の豊
かになるを見つつ働く

和歌山 奥村 映水

漁船を人引上げて去りし後鵜むら
がる寒き磯濱

和歌山 奥村 映水

若人が出でて耕す春の田のこころ
よくして馬のいななく

山口 長岡 健一

病む床に手離さざりし繪本ども吾
子の柩に入れてわが泣く

兵庫 北原 水

木の間洩る月の光にたたずみてわ
がさびしさを何につたへん

ほのかにも思ひ出せし面影のまぼ
ろしのごと消えはてにけり

朝鮮 寶 美玉

入相の淋しき今日を如何にせん呼
べど吾子は苔の下なり

愛知 平野 堅逸

何げなく歌へば聲のこだまして深
山の道のおもしろきかな

奈良 奥田 秋郊

一言寺句碑を濡らして春雨の訪ふ
外に立つ人もなし

廣島 上原 良人

麗らかに日あたる山の木々の雪音
は聞えずしづくして落つ

小倉 益田 慧光

夜もすがら窓打つ風のなかなかに
激しからぬがさびしかりけり

新潟 榎本茂一郎

産終へて歸りし妻のふところに抱
かれたる子のいとほしきかな

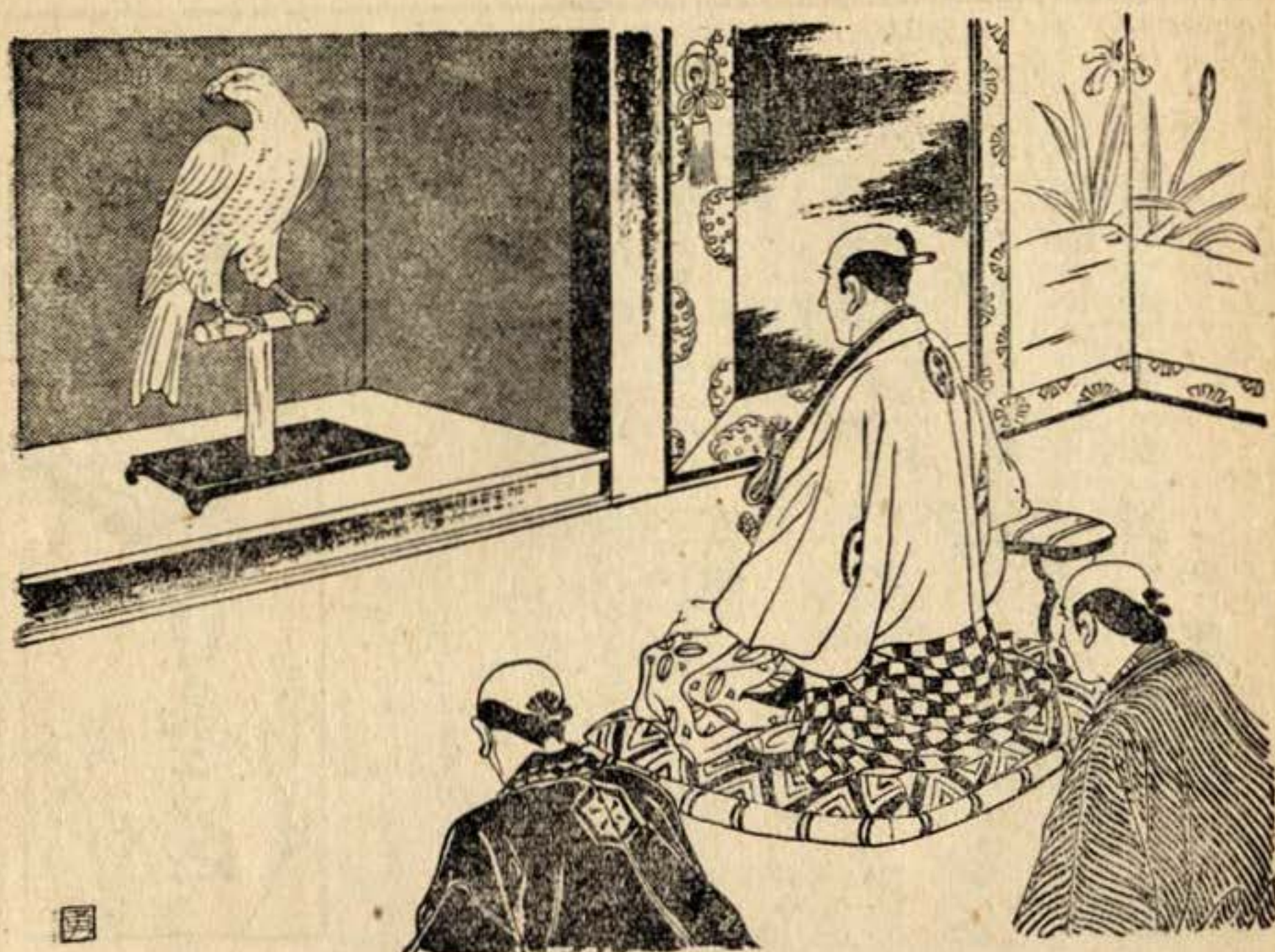
滋賀 本間 秀道

何となく口惜しけれどわが求む憶
れの日には未だ來ぬらし

北海道 花田 順往

先きたちしうからやからも一卷に
記して代々に弔はせばや

與謝野先生御病氣の爲め本歌壇の選は
私が致しました。不備の點は全て私の責任
です。尚、歌はその人の人格の現れであり
ますから、歌をお詠みになるほどの方は常
に眞實な生活と思索と深い教養を培養なさ
るやうにお願ひいたします。根底の美田が
耕作されれば眞に光つた歌は出来ませ
ん。いい加減な日常茶飯の歌は全て捨てま
した。(岩野喜久代)



講 談

置物の鷹

桃川若燕

浅草諏訪町の 大工棟梁政五郎の家へ若黨草履取を連れまして武士
 「大工棟梁政五郎殿の御宅は此方か」政「へい手前で」『拙者細川越
 中守家來用役を勤むる坂部三彌と申すものじやが、當家に飛驒の山添
 から参つた甚五郎と云ふ者が居られるか』政「エ、居りますが、何の
 御用で」三「少々頼みたい事があつて……」政「左様でゐますか」
 三「サ何卒此方へおあがり下さい……オイ甚五郎お前にお客様だ下りて
 きな」

甚「此江戸に知り合もないが誰だナ」政「立派なお武家様だ……ま
 切望此方へお通り下さいまし」三「然らば御免を蒙る」
 と供の者を土間に待たせ奥へ通つた。それへ甚五郎は兩手をつき、
 「私は甚五郎でゐいます」三「オ、其方か。拙者細川の家臣坂部三彌
 と申す。今日参つたは外でもない、久しい前に東海道鳴海宿の大松屋
 佐平方で、竹篋の水仙を刻んだ事があるであらう」甚「へい、へい」

三「夫を殿がお買上げに相成つて殊の外御機嫌に遊び、就いては此度殿からお望みに依つて其方に彫らせたいものがあるとの御意であるが何所に居るやら居所が分らぬから、わざ／＼鳴海迄調べに往つて宿帳を見ると飛騨の山添工匠の弟子であると云ふ事を承知した。早速工匠方へ飛脚を立てた處、彼方の返答には江戸表諏訪町の大工政五郎方に食客して居る趣き、漸く居所が知れたので今日頼みに参つたのだ」

—— 置物 ——— 甚「へエー、ドウモ色々御手数をかけまして誠に恐入りました。その御用は」三「殿の仰せに床の間の置物にする鷹を是非其方に彫らせろとの御沙汰なので」甚「へエー成程」三「急に出来やうか」甚「宜しうございます。お急ぎとあらば精々早く致しませうが、鷹は飛んで居る所でございますか」三「置物のことだから撞木に留まつて居る。：雛形も持参して参つた」甚「それを拜見ませう」三「デハ見て呉れ、然し此通りに彫れとは申さんから」甚「へエー、何うも見事で實によく出来て居りますな——是は何と云ふ方の筆で」三「是は狩野法眼の弟子法雪の作だ」甚「法雪——旨く書いたもので、エ、矢張此大きさでお宜ろしうございますか」

三「殿様の御好みは一尺二寸と云ふのだ」甚「宜ろしうございませう。材は何か御注文がありますか」三「夫は御好みは無い。其方にまかせろ」甚「それでは姫小松で刻みませう。——エ、殿様の居らせられます處と床の間まで間敷は何の位はなれて居ります」三「まづ二間半位であらう」甚「泊り撞木も手前の方で拵へ上げませうか」三「さ

うして貰ひたい。——それで何日程で出来る」甚「左様——廿日で仕上ます」三「それでは餘裕を見て、廿五日間で出来ますと殿様へ申上げて置うか」甚「イエ大丈夫二十日間に致します」三「デモあらうが萬一間違つた時には困るから五日間の餘裕を」甚「イエ必ず間違ません。私も男でムいます」三「然らばそれ聞いて安心致した、シテ代は何程であらうか」甚「左様でムいますな——」

此方で黙つて聽いて居た政五郎、ハテ幾ら位で請合ふものか知ら、自分は斯ふ云ふ事を手掛けませぬから考へて居ると、

甚「是迄重ね／＼御手数をかけまして彼地此地をお尋ね下さいましたから、私も精々勉強いたしましたして百兩で宜しうございます」

聽いて居た政五郎も吃驚して居ると、坂部三彌も少しく考へて居りましたが、

三「ア、一羽で宜しいのだよ」甚「素より一羽は承知して居ます」

三「それで精々……」甚「へイ精々働きました」

滅法界に高いと思つたが、又下らぬ事を言つて殿の御外聞に相成るやうな事があつてはならぬと考へまして、

三「夫では切望宜しく百金は承知したから精々いたしくれ」甚「へイ畏まりました。就きまして御用人様へ御願ひしますが甚五郎貧乏でムいまして材木を買ふ事も出来ませぬから、一とつ材木代を頂きたり存じます」

傍で聞いて居た政五郎、材木と言つたつて高が知れた姫小松、幾ら

するものかケチな事を言つたものだ。俺が附いて居るから其位の事は何うにでもなる、と斯う思ひましたが、眞逆に口を出す譯にも往きませぬから黙つて控へて居りますと、

三「ア、宜しく何程置いて参つたら宜いか」甚「へい材木代として半金置いて頂きたう存じます」三「ナニ」甚「エ、五十兩頂戴を」三「ウム——然らば掛りの者に早速届ける事に致さうから其心得で」甚「へい有難う存じます」三「日限を違はぬやうに」政五郎手數で在つた」政「何うも恐れ入ります、切望殿様へ宜しう」三「甚五郎何分頼む」

物

と三彌は供方連れて立歸る後を見送つて、

の

政「オイ、甚五郎、甚五郎」甚「エ、」政「せうだんじやないぜ」甚「何を」政「何ほ念入の鷹を彫るたつて滅法界に高えじやねへか」甚「アハ、、相手が細川越中守様だ。モツと澤山取らうか

鷹

と思つたけれど」政「まだアんな事を言つてやあがる」甚「ダガ

ネ棟梁、故郷へ尋ねて往つたり、鳴海へ調に出掛たりして随分色々手數を掛けて氣の毒だから、百兩に負けてやつたのだ」政「夫は宜いけれども、材木の錢を半金取るのは随分手苛いぢやないか」甚「仕事に掛る前には前祝ひをやらなければ仕事に張合がねへからよ」政「また飲む事ばかり考へて居る」甚「外に楽しみあねへのだから」

翌日に相成りますると細川家より五十兩の金子が届いたが、別に甚五郎の印は無いから政五郎が印を捺して受取を出す。

政「さあ五十兩遣入つたよ」甚「其奴ア有難い。それは棟梁に預けて置かう。是迄散々物を使はせて居るから之れを喰扶持と思つてよ」政「其んな心配をしねへでも宜いのに」甚「イヤ然うでねへ、姐さんに渡して置いてお呉れ。まだ半分残つて居るから大丈夫な物だ」

と言つて居る。門口から魚賣が、

「エー今日は」甚「ヨ、魚屋か構はねへから、其半豪の魚は悉皆拵へて仕舞へ」奴々早く酒を買つて来い、酒を一斗直に持つてこい、皆んな歸つて来たら前祝をやるんだ」

と大景氣其裡に職人が歸つて来た。

甚「サア、御苦勞々々、今日は上仕事が無込んだ。前祝に飲んでくんない」○「さうでエすか御馳走に成りませう」△「甚五郎さん済まねエ」□「素敵な刺身で頂きます」

ガブ／＼飲む、ムシヤ／＼喰ふ、政五郎も、自分の家の物を飲ましたり喰はしたりしないのだから宜いやうなもの、翌日になると皆んな仕事を厭がつて、

「棟梁、些と飲過ぎたんで頭が痛てえ、今日は休ましてお呉んなさい」政「甚五郎、若え奴に酒を飲ませるも宜いが、休みが出来るんじや困りものだよ。よし、頭が痛ければ休んでゐろ」○「へい有難うござえます」甚五郎兄哥、一盃附合ふか」

と仕事を休んで飲奴もあり、政五郎も弱つちまいしました。甚五郎は毎日／＼酒浸しだ。

政「然う飲んでゐたら毒だぜ」
甚「ナアーニ常人の嗜な物は毒にも
なりませんよ」

と半月たつたが、何んにもしませ
ん。此方は坂部三彌、餘程仕事は進
んだらうと供をも連れず諏訪町へ：

三「政五郎お在るか」政「へい、是
はお入來なさいまし。まづお通り下
さい」三「免せ……」政「さて、御
用人様へ申上様もないと云ふのは、
お金を頂戴してから毎日／＼酒ばか
り飲んで、まだ仕事に掛りませんの
で」三「ナニ掛らぬ……」甚五郎は何
所に居る」政「二階に居ります……」

オイ甚五郎／＼早く來ないか」

甚「へい唯今……是は／＼御用人
様、よく入らつしやいました」三「其
方と約束の日數は廿日間、殿へも申
上てあるが、後五日ばかりしかない。
何じや出來いたすか」甚「まだ材木
も買はないので」三「夫は怪しから



ん。コレ、甚五郎前へ出る、イヤサ其
方は……」甚「マアーマア、待つて
下さい。そんなに御腹を立つても仕
方がありません。酒を飲んで居る時
に小言を言はれちや酒が理に落ちて
旨くありません」三「ちやと申して
あの節廿日間で間違があるとならん
に依つて五日間餘裕を附けると申し
たを、其方が廿日で大丈夫だと請合
うた」甚「請合ましたよ」三「出來
ねば殿へ申譯が」甚「あつても無く
つても私は構ひません」三「汝れ怪
しからぬ奴だ」甚「其んなに大きな
聲を出して怒らなくつても……約束
通り日限に拵へたら宜うございませ
う。其んなに怒つて眞赤になつてさ
……三彌が赤く成つたから今戸は火
事だらふ」政「コレ甚五郎、何うし
た者だ。御用人様へ御無禮ぢやねへ
か。……醉が醒ましたら篤と意見を
加へ、早々仕事をさせます……私か

ら御詫を申ます。何うか御勘辨下さいまして」三「政五郎、お前には氣の毒である……よし酒に狂ふた酒狂人、對手には出来ぬ……實は殿へは五日餘裕を取つて申上てあるから、今日から十日間に出来致すやう取替つて呉れ」政「へい篤と當人に申聞かせて間違ひなく出来るやう致します……アレ御覽下さい、あの通り眠込んで仕舞ました」三「困つた奴ぢや、……宜き様に頼む」

と三彌は歸りました。甚五郎、グツスリ眠り込んだが、日の七ツ頃に目を覺して大欠伸をしながら、

甚「アア、……ムニヤ／＼／＼、お夏どん、水を一杯お呉れ」政「オイ甚五郎、水を飲んだら一寸爰へ来てくれ」甚「エー何んです、棟梁」政「好い加減にして呉れねへじや困らア。先刻御用人様が出来て」甚「左様ですか」政「左様ですかじやねえぜ。大變に怒つて居たが、お歸りがけに五日間の餘裕を見て申上て置いたから、十日間に拵へるやうよく／＼甚五郎に申聞かせよ、と仰があつたが……何うだ出来るか」甚「濟みません。逢喰ひ酔ふと夢中に成つちまいますので、併し屹度拵へますから御安心なすつて」政「そんなら明日から拵つて呉れ」甚「宜しうございます」

と仕事を仕舞つて歸つて來た者を對手にして又一盃やらかして、其晩は早めに眠込んだ。翌朝早く起て楊子を咬へて朝湯に出かけ、湯から歸つて参りますと、

甚「姐さん／＼」でん「何だよ」甚「アノ味噌汁に鯉節が這入つて

居るかね」でん「何だね、お前、鯉節の這入らない味噌汁など喫させたことはないよ」甚「夫ではお茶を下さい」

と味噌汁は喫ず香物で飯を喰て仕舞ました。後世に至る迄名人と言はれる程の人物丈あつて、彌々今日から仕事と拵ると云ふ朝は早く起き湯に行つて身體を淨めて來る位だに依つて大精進、酒は一滴だに飲みません。さて仕事に拵ると二階昇つた限りコツ／＼コツ／＼やつて居る。兩便に行くか、飯時の外は決して下へ來ない。七日目に出来致したもののか、小僧に吩咐てお供へを買ひにやり、白木緞の布へ彫上つた鷹をくるみまして、泊り撞木は別にして三寶の上へ載せ、聖徳太子様へ御神酒を供へお供を上げて、チャンと飾り付けまして燈火をかけ、二階から下りて來た甚五郎、

「御心配をかけましたが到頭出來ました」政「さうか、夫は豪勢だ」甚「明日あたりは御用人様が來るでせう。出來てゐなかつたら今度は棟梁が鯉突を喰ふと氣の毒だから一生懸命に拵へました。今日は姐さんに言ひつけて何か下物を拵へて一杯飲まして」政「ア宜いとも……何かさかなの交度してやんな」

と政五郎は甚五郎を眞の兄弟同様に色々世話をしてやります。翌日になると、

三「先達は大きに……」政「サア／＼お上り下さい、お待ち申して居りました……お約束通り出來て居ります」三「ハ、左様か、何うあらうかと心配しながら参つた」甚「是は／＼、御用人様お出なさいま

し……過日は少し喰へすぎて居りました、頓だ失禮を致しましたが何卒御勘辨を……」三「イヤ、此方も殿へ申譯が無い儘に些と言過でした」甚「何う仕りました」三「出来致したら早速檢分を仕やう」甚「何うか御覽下さいまし」

と甚五郎は二階から三寶の儘持つて参りました。

三「ウム是か……」

と木綿の切れを取除けて暫く捻くつて居たが、

三「如何に仕事を急ぐからと云ふたとて、まだ本當に出来上らぬものを出来たなど云はれては困るな。此方は素人ぢやから分らぬが……」

甚「イエ出来上つたのです」三「ウム……出来は良いのか」

甚「上作も極上に出来ましたので」三「フォーム極上作、これが……では殿様へ御覽に入れるであらう。殘金は係りの者が届けるであらう」

と三彌は邸へ歸り早速御前へ罷り出、

三「唯今立戻りました、御注文の品は出来致して居りました」殿「早是へ」

三彌は殿様の御手許へ品物を出し、自分は遙かに此方へ下がつて控へました。越中守殿は暫らく捻くつて居られました。三彌此方から見て、

「ほーら、始まつた。俺が見てさへ吃驚したのだ。殿はさぞお驚きだらう」殿「三彌是はまだ出来上らぬが」三「イエ出来致しましたので」殿「ム、是を見よ。眼が這入つて居らぬやうじや」三「御意にござ

います。眼が這入つて居らぬやうで」殿「居らぬやうではない。甚五郎に申付けて早く眼に入れさせえ」

三彌も考へた。之を持つて行つて眼を入れさせるのに又毎日々々足を運ばせられては大變だ、と斯う思ひましたから、

三「エ、恐れながら申上ります。何もお慰みでございますから甚五郎を御當家へ招きまして、御前にて眼を入れさせましては如何でございませふ」殿「オ、夫も面白い事じや然らば甚五郎を呼べ」三「ハッ」直に棟梁政五郎方へ使を出しました。

此方は政五郎が、

「先刻御用人様が妙な顔をなすつて頻りに捻くつて居なすつたが、ありやあ出来て居るのか」甚「出来て居ます、居ますがまだ眼を入れねえだけの事なんだ」政「エッ……目を入れね……なぜ其んな事をす

るのだ」甚「目を入れてしまふと、あと金の五十兩が取りにくいから」政「冗談言ふな。詰らねえ事ばかり言つてやあがる。……ヘイお入來なさい。オイ甚五郎、お邸のお使だ。……エ、何御用で」使「甚五郎に眼を入れに早速参るやうに、との事でござる」政「ソレ見ろ、甚五郎、お召だ目を入れに來いとよ」甚「オヤ、オヤ」政「オヤ／＼では

ねえ。手前が悪いのだ」甚「ぢや入れてやらふか。まあ棟梁、あり金は安心だ。是から往つて眼を入れさへすれば、五十兩はきつと取れると。取れるとまた飲める」政「あれ、また飲む事を……困り者だなあ……オイ甚五郎その仕度じや餘り見ツ共ねへ。おでんや、俺の羽織を



出してやんな」でん「さあ甚五郎さん其方をお向き」甚「何うも姐さん有難う」政「行も丈も丁度宜いな」甚「丁度宜いから貰つて置きませうか」政「せうだん言ふなよ」甚「お使、大きにお待遠うさま」甚五郎は使者と共に細川家へ……直に坂部三彌へ甚五郎が來たと告げる。

三「オ、甚五郎、大儀であつた。アノ鷹には眼が這入つて居らぬナ」甚「へいまだ這入つて居りません」三「道具はあるか」甚「持參してまゐりました」三「殿様の前で眼を入れるやう御沙汰である」甚「畏まりました」

越中守殿は、甚五郎と云ふ名人は何んな男であらうかと人物を御覽なさるつもり、

「三彌、甚五郎は來んか」三「ハッ召連れまして、お次に控へさせました」殿「この廊下へ通せ。苦るしゆうない」

とお免を蒙りました。甚五郎は御居間の廊下へ出て平伏します。

殿「甚五郎、面を上げへ」三「ハッ、甚五郎面を上げへ、面を上げよ、イヤサ頭を上げるんだ」甚「エ何處へ上げるのだ」三「頭を何所へ上げる奴があるものか、只持上げさへすれば宜いのだ」甚「へい、殿様今日は」三「コラツ口を利いては成らん、黙つてく」殿「捨置けく、オ、立派な人物じや。予が前でこの鷹に眼を入れて見よ」甚「お硯をお借り申し度いので」

と甚五郎、懷中よりきたない敷布出して膝の上に敷きまして芥の散

らぬやうに致し、鷹を左の手に持ち、師匠工匠墨繩より譲られました革袋に入れてある鷹を一挺取出して、ブツリ／＼と頻りに鷹の目を彫りまして、筆を染めて此れで眼を入れました。夫から泊り樟木を床の間へ持つて参り、其上に鷹を取付けまして此方へ下りました。越中守殿、床の間の方をヒョツと御覽なさると、ハタと膝をお打ちなされた。それもその筈、手元にある時は實に何と云ふ出来であらう、これ出来致したのかと思やうでありましたが、京間二間半離れて居る床の間に飾り付けて見ると、宛然鷹が活きて居て、今にも飛出すかと思はれるばかりであります。明治の初期に博物館に出ました時は鐵網が掛つて居ました。實に活々たるものでありました。

殿「三彌々々」三「ハッ」殿「それから見い嗚呼實に能う出来た」と仰がりますから、三彌は恐る／＼顔を上げて見ると成程と感心致し、

「到底餘人には出来るものではございません……私もこれで安堵いたしました」殿「甚五郎、美事の出来じや。これ三彌彼は酒を好むよし。次に於て十分に興へ遣はせ」

是から次の間に結構な御料理が出て、三彌が對手でございます。

三「あゝ／＼遠慮せず充分にやれ」甚「同じ頂戴いたしますのなら大きな盃でいたゞきたうございます。何うも酒は大盃でなくちやありません。是は結構なお肴で有難う存じます。何うも恐れ入ります。エ、御用人様、私供は却て手酌でやらかす方が勝手に、酌などされる

と窮屈で十分にやれませんか」三「それでは自由に致せ」甚「へい有難う存じます」

三合もはいる盃に浪々注いだやつをグイと息をも吐かず一と飲み

に、
「ブー、ドウも結構なケヅリで……」三「妙な事を申たなケヅリとは何んだ」甚「ケヅリ……」三「ケヅリとは」甚「へい大工仲間の符牒でございます。酒の事をケヅリと斯う申します」三「實は殿様、近頃下々の言葉を知り度いとの御望み、申上たら嘸御悦びに成らう。まてまて、酒の事がケヅリか。まだあるか」甚「肴の事をケヅリ臺と申します」三「ハテナ」甚「帯の事をナゲシと申して、着物をトバと申します。夫から飯を喰ひます事をホゾをつくると申しまして、恐れ乍ら大便を致します事をクサビをそぐと申します」

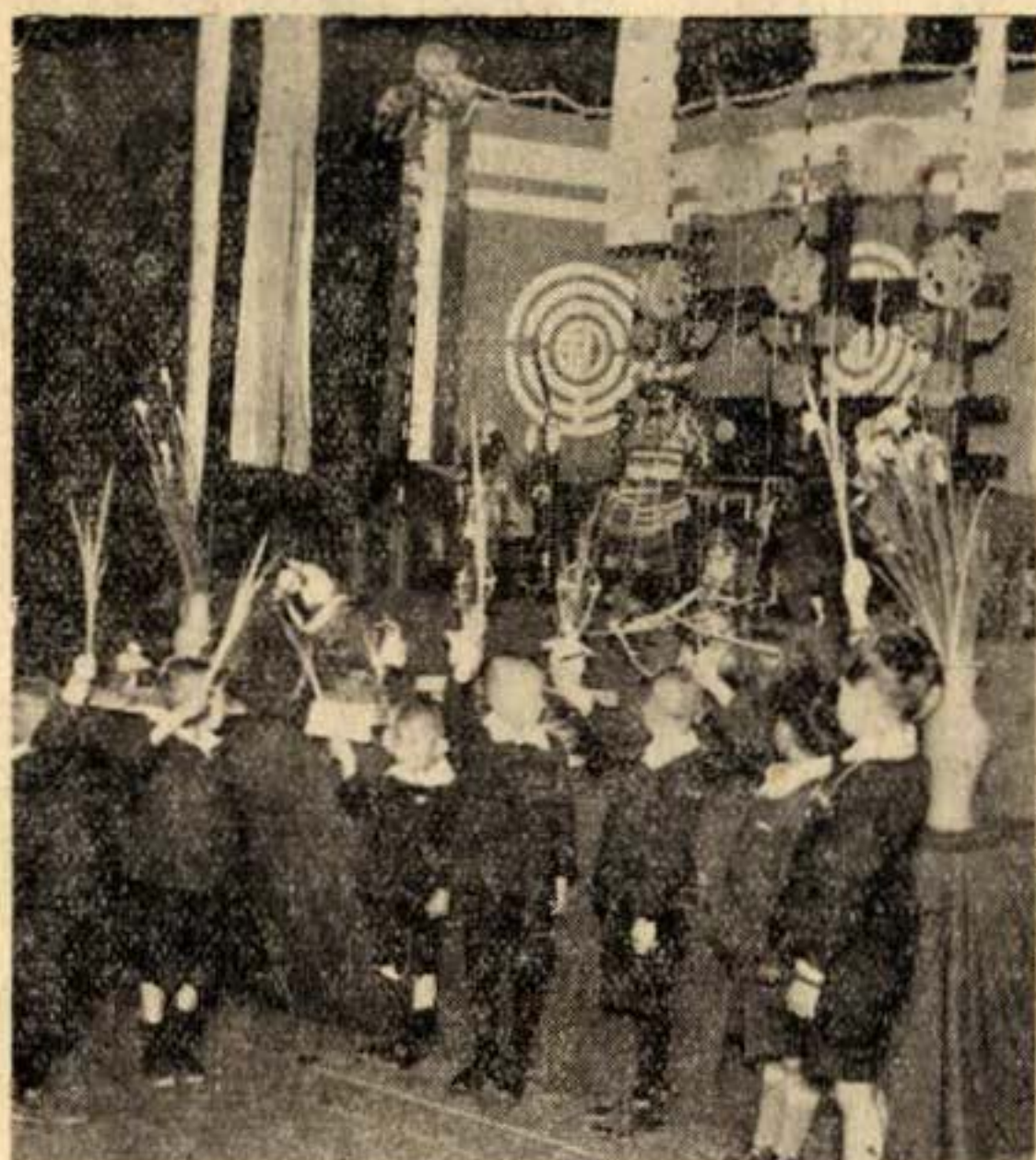
三彌はおぼへきれませんから、矢立を取出し筆を染め、

「酒がケヅリか、成程、酒の肴がケヅリ臺だナ。着物がトバで帯がナゲシか。まだ何んとか申したな」甚「飯を喰ふ事をホゾをつくる」

三「ホゾをつくるか」甚「大便を致します事をクサビをそぐと申します」三「もう夫でよい。さあ／＼飲んでくれ」

甚五郎上々の首尾で御馳走になりました。

三「手を付けぬ肴は重につめてやるから、邪魔でもあらうが政五郎へ持つていつて遣はせ。さて是に金子五十兩、外に十五兩御褒美として下し置かれるぞ」甚「有難う存じます」



大和魂
を養ふ

五月人形の 話

杉村文作

一、菖蒲 胃

有名な話に、徳川家康がまだ竹千代と言つて、今川家の人質になつてゐた頃、從者に負はれて石合戦を見に行き、小人数の方が勝つと豫言したところ、果して小人数の方が勝つたといふ話があるが、此の石合戦の事を印地打といつて、昔は例年五月五日に、男子の遊戯として廣く行はれた。

五月五日即ち端午の節句の日に、男の子達は菖蒲胃をかぶり、菖蒲刀をさして、此の印地打に参加したのである。ところが、大人迄加はるやうになり、石だけではなく、棒、木刀、時には眞劍等を持つて合戦に臨むやうになり、そのため死傷者をも出すに致つたので、この印地打は寛永——享保の頃に禁止された。

菖蒲胃は初め菖蒲で胃の形を作つたものであつたが、それが紙で形を作り、その上に種々な花をかたどるやうになり、さては前差のところに紙人形を作りつけるやうにさへなつた、此の紙人形が胃から獨立して、後に説く菖蒲人形となつたのである。

前述した如く、菖蒲胃は印地打の時の武器であつたが、印地打が禁止されてから裝飾物と變じた。そして木製となり、次第に金をかけて種々の飾物を附するやうになつた。

そんなわけで、菖蒲胃が段々贅澤になつて來たので、慶安元年四月、菖蒲胃に對する最初の法度がしかれた。當事の事情を雄辯に物語つてゐるから擧げて見ると、

一、五月節句の胃、結構時繪梨子地金物絲類仕りまじく候。但し御城様へ上り申候。胃は苦しからず。

一、小旗の儀、絹布一圓仕りまじく候。但し布木綿は苦しからざる事。

一、いかにも魚相なる人形二つ三つ有之。胃は苦しからざる事。

更に明暦二年五月には、

一、胃の事結構に仕り、商賣に仕り

まじき旨相觸れ置候處、狼りに有之由に

候。此上結構なる胃以下商賣仕り

候者は、家主共に急度申しつくべく候。

勿論結構なる胃小旗吹貫等立て候事堅

く停止なすべく候。附り、節句に人形

多くあやつり、からくり等致し、人集め仕

りまじく候。若し違背候輩有之においは、當人は申すに及ばず、五人組共に曲事たるべし。

これは菖蒲胃の商賣を禁じたものであるが、すでに明暦年間に於て、菖蒲胃の商賣人があつた事を證してゐる。

菖蒲胃は、言はば五月人形の先祖であつて、菖蒲胃から菖蒲人形、菖蒲人形から近世の五月人形へと發展したのである。

二、菖蒲人形

胃人形から獨立した菖蒲人形は、櫛、槍、長刀と同じく、初めは戶外に立てたものであつた。人形自體としても初めは厚紙

で人形の形をとつた粗末なもので、馬にしても菰の葉で作つたもの、槍長刀も木を削つ

たもの、櫛も紙製ですべて粗末なものだつたが、それが次第に美をこらすやうになり、

戶外から室内に飾るやうになつてから急速な發展をとげ、人形師さへ出現するやうになつた。

戶外から室内へ移つた原因としては、町の發展につれて道路が狭くなつたこと、火事

が頻繁に起こるやうになつた事等が數へられる。

菖蒲人形は本來力士の形を模したものが多い、江戸でも元祿の頃までは市中を賣り歩いてゐた。

五月雨や傘につけたる小人形其角にこんな句がある。

元祿以後は十軒店、人形町等でこれを賣つた。またその後、鎌市のやうに櫛市が開か

れるやうになり、京都では四條、大阪では御堂の前、江戸では十軒店、尾張町、麹町等

で、四月初から（江戸では四月廿五日から）盛んに五月人形が賣買されるやうになつた。

三、五月人形

さて五月人形（武者人形）は、前に述べた如く菖蒲胃の前立の獨立變化したものである

が、鎌人形の影響もゆるがせに出来ない。

五月人形は元來鎌の形式を基礎とし、男

子の遊び或は祝福にふさはしいものに作られた。昔は尙武といふ事を第一義にしたが、後には他に子供の將來を祝福する意味

から、武人や武具ばかりでなく、偉人や孝子をも人形に作るやうになつた。たとへば養老の孝子とか二宮尊徳等がこれである。

五月人形の品種をあげると、その主なるものには、

神武天皇、饒道、神功皇后、武内宿禰、金太郎、桃太郎、加藤清正、巴御前等がある。

通例として神武天皇のは、御東征の時の、金鶏が弓の先にとまつたものであり、神功皇后のは、三韓征伐の時の御陣中の御姿である。

金太郎桃太郎等は、時代の要求につれて變化し、豆撒き、鯉抱き、鯉釣、熊と兎を友達にしてゐるところ等種々あるが、さきの御大典の時には、錦の御旗を擁してゐる金太郎さへも作られた。

ところで次に、生産地による五月人形の種類を調べて見ると、

御所人形
大阪人形
奈良人形
鴻巣人形
三春人形
鹿兒島人形
カナカンブツ人形

大體右の七種がある。

御所人形は京都で生産されるもので、人形の姿が優美で、五月人形の中で最上のものでされてゐる。御所人形の中でも有名なのは、「金冠」と稱するもので、これは、豊太閤の冠るやうな冠をいたゞいて、今まさに紐を締めようとしてゐるところが人形になつてゐる。その、今まさに紐を締めようとするポーズが面白いとされてゐるのである。しかし時には、鯉を抱くものやら、烏帽子に裸體で太刀をはいした可愛い、姿のものもある。

大阪人形は衣装人形を主としてゐる。首や足は木彫又は練物で作られ、顔は浮世繪とか文樂人形等に似てゐる。大體大阪人形は文樂座の人形芝居の影響を受けてゐるので、團十郎とか、坊主小兵衛とか、右近源三衛門とかの似顔の人形も作られてゐる。

鴻巣人形は埼玉縣の鴻巣で作られるもので、種類も多いが、五月人形にふさはしいものは金太郎人形である。

三春人形は福島縣の三春で作られるもので、鴻巣人形と同じく金太郎人形が有名であるが、別に三春駒と言つて、木で簡単に形を

作り、それに尾やたてがみ等の毛を入れた、至つて素樸な、郷土玩具として面白いものがある。

鹿兒島人形は、加藤清正のやうな鎧武者が、木馬に乗つて旗差物をつけた、勇ましい人形である。

カナカンブツ人形は、天保頃迄甲州で作られた。領主武田信玄の舊恩を忘れぬために作られたものださうで、顔は信玄に似てゐる。兜人形と言つてもよい程簡單なものだが、現在では製作されなくなつてゐて、好古者の間にもてはやされてゐる。

奈良人形は一刀彫の技術を發揮したものが主で、橋辨慶のやうに、能樂又は舞樂の人物を取り入れてゐる。

以上あげたもの以外に「堤人形」「名古屋人形」等がある。

五月人形は大體箱根を境にして東西に分れ、西は御所人形、伏見人形、奈良人形、大阪人形等を用ひてゐるが、金太郎はあまり見受けなない。ところが東では、各地の人形に必ず金太郎がある。一體に關東は武張つたものの、關西は優雅のものが多いやうだ。



通俗方丈記

(二)

佐藤春夫述

治承四年の四月の頃には又大きな旋風の起つた事があつた。京極のほとりに起つて六條のあたりまで吹いたものであつた。全く物すさまじい勢のもので、三四丁も吹いて行く間に、ぶつつかる所の大きな家でも、小さな家でも殆ど覆したり、破壊したり、破損したりしたものであつた。それ程すさまじい勢に吹きつゝつた事であつた。

旋風に巻き込まれてその儘地上の上にペシャンコに倒されてしまつたものや、桁と柱だけが残つて障子や、壁はすつかり吹き抜かれてしまつたのもあつた。そうかと思ふと門を吹き飛ばして四五丁も先に持つて行つてしまつたり、垣を吹き飛ばしてしまつて隣家との境を取のけてしまつて庭續きにしたりして方々にとんだ悲喜劇を起させた。家々にある色んな家財道具の類も根こそぎにすつかり空に吹き上げてしまつた屋根を覆つてゐる所の檜皮葺板の類は丁度多の頃に木の葉が風に舞ひ上る様に亂れて空に吹き上げられた。

煙が都の空を全く覆つてしまつたのではないかと思はれる程に都の空には塵や埃が舞ひ上つて天日爲に暗さを感じた程であつた。人々の話し聲等は荒れ狂ふ強風の爲に

笑話



裏のまた裏

夫「お前は全く美しいな、夫の俺でさへ惚ぼれするよ」
妻「貴方は心にもないことをおつしやつてゐるんでせう。」
夫「どうしまして。お前こそ心にもない謙遜をして、内心はそのつもりなんだらう。」

低くすぎる

ホテルに來た客、第一階が十五圓、第二階が十三圓、第三階が十一圓、と一階上る毎に二圓づゝ安くなると聞いて、ポケットの金

全く掻き消されてしまつて聞へる所の騒ぎではなかつた。都の街々に聞へるものは唯風の吹き荒れるすさまじい音響のみであつた。その風の荒れる様のすさまじさはまるで傳へ聞く地獄の業の風が現實の世に吹くのかと思はれる程のものであつた。吹き倒された家、破損された家、それ等家々の無残な様子は全く目も當てられない程である。又住家等の破損した場所を修繕し様として外に出て仕事をしなくてはならぬとそこへ何か大きなものが吹き付けて來て哀れにも不具者となると云ふ様な人々も數多くあつた。眞に氣の毒な人々である。この旋風は又西南の方に向つて動いて行つて其處に住んでゐる人々に對しても前同様に色々な損害を與へて人々を悲しませた。春夏秋冬を通じて風が吹かない時は無いものであるが、何時もの風は風情のある心持の好い風であるのに今度の風はすさまじい風で、數多くの損害を人々に與へたのである。こんな風は何年かの間に一度とあるか無きかの風であつて眞に珍しい例外とも云ふべきものである。今度の大惨事の事を深く考へて見るとこれはきつと天の神様が地上に住む人々に對して一つの警告として與へて下さつたものだと思へざるを得ないのである。

治承四年六月頃の出來事であつたのだが、俄かに都が他の場所に移つた事があつた。この事が非常に急に、不意打ちに行はれたので都の住人は驚き且は狼狽したのであつた。

大體京都に都が定められたのは嵯峨天皇の御時であつて、もう既に四百餘年も經つてゐるのであるから、何か特別の事情の無い限りはさう易々と都を改める等と云ふ事はあるべからざる事なのである。だから人々はどんな特別の事情があるのかと心配して、その心配の餘りに平和であつた人心が亂されてしまつたのも眞に無理からぬ事ではあつた。けれども人々の心配も何もあつたものでなく、遂に天子様はもとより、大臣、公卿達も皆悉く新しい都である福原へ移轉してしまつた。世に重要な地位を占めてゐる人々はもう誰一人として古い都の京都に住んでゐる人は居なくなつてしまつた。位人身を極める事を唯一の希望とも理想ともする人々や、天子様の御覽への目出度い事を願つてゐる人々は一日も早く古い都を捨て去つて新しい都の福原へ移り住む事を一途に心がけた。けれども



を數へてゐたが、急にさつさと外へ出て行く。

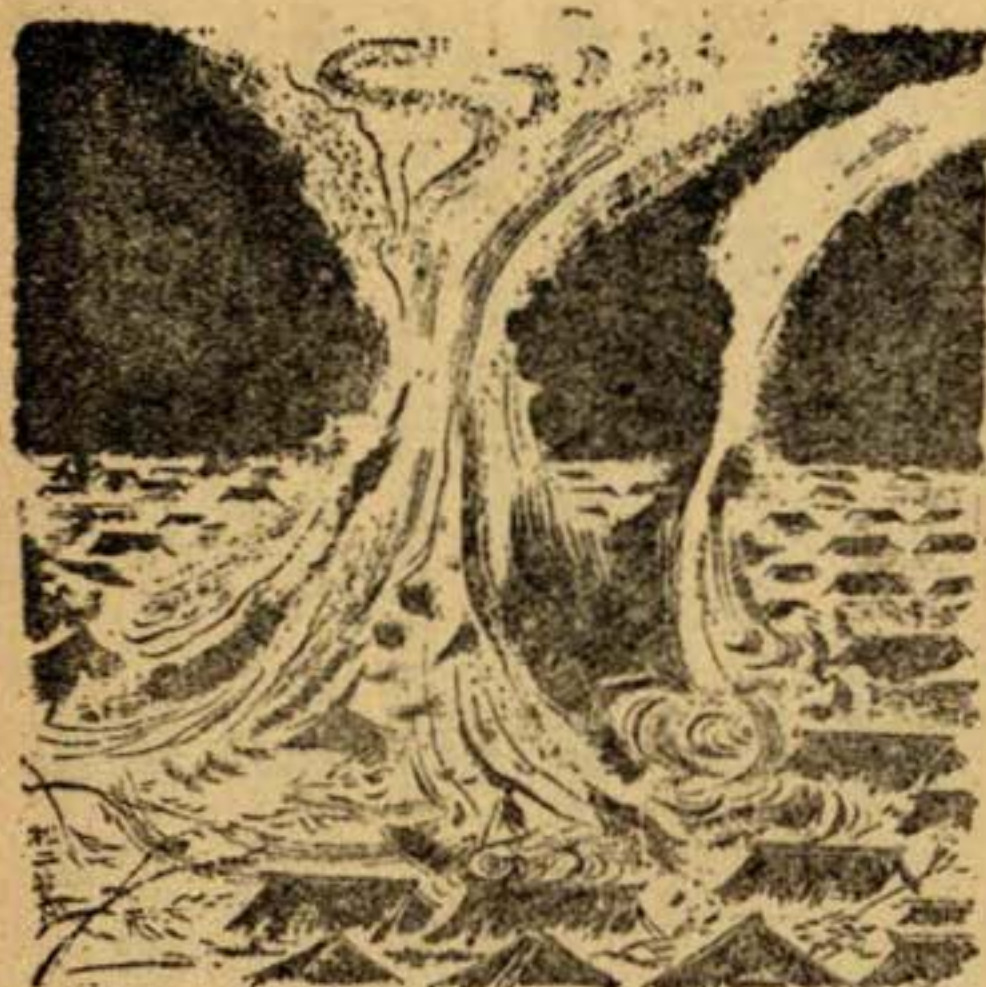
番頭「もしく、お泊りになりませんか?」

「うん、もつと建物の高いホテルへ行くよ」

好きな言葉

一緒に飯を食ひに料理屋へ入つた二人連。

「僕の一番好きな言葉は『有難う』つて云ふ言葉だね。英語でサンキユー、獨逸語でダンケ、佛蘭西語でメルシ僕はこの言葉が大好きさ。」
「僕にも好きな言葉が一つある



世に取り残されて位もなく何等の望も、理想もない人々はこの出来事に對して悲しみ、愁へながらも古き都を捨て得ずに淋しく残つてゐたのである。

高位高官の人々、富有な人々の居なくなつた古き都の有様はあまりにも物淋しかつた。軒並にその美しさを争つてゐた堂々たる住家は、日が経つにつれてだんだんと住む人もなく手入も行き届き兼ねて荒廢し果てた。又その住家の中には打ち壊されて福原へと筏に組まれて淀川に浮べ送られて行つたのも多い。毀れた屋敷の跡は見てゐる間に畑になつてしまつた。眞に昔の面影すら見る術もない有様であつた。こんな大きな變事は人心にも多大な影響變化を與へずには措かなかつた。見る見る中に都會人としての優雅な氣持はすつかり無くしてしまつた。そんな氣持が色んな所に現れたものであるが先づ昔の様に牛車等に公家達が乗つたのも、もうそんなものには乗らずに武家風に馬に乗つてその敏捷な所を好むと云ふ様な所に現れて來た。これを見ても昔の如く優雅なのんびりとした風はなくなつてしまつた。又その所領の望みでも今は平家に繼ぐ故の多い西南海の所領を人々は目ざしたけれども新都に遠く離れた東北の庄園は誰も望むものはないとなつてしまつた。この様に總てのものが變つてしまつたのである。

私はふとした偶然の事から攝津の國の福原の新しい都の有様を見る機會を得たのでその狀態を述べて見ると、先づその廣さと云ふものは京都に比べると實に狭いもので、京都に習つてその市街を基盤の目の様に區劃する事さへ出來ない有様なのである。北の方は山になつてゐて高く、南の方は

よ。」
「ホウ、それはどんな言葉だね。」
「それは、少し長いんだがね。」
「よ、い、よ、僕が拂つて置くから」つて云ふ言葉さ。

問はず語り

甲「このころは一生結婚しないつて云ふ女が随分多いね。」



乙「どうしてそんなことが解るんだい」

甲「僕が申込んだ女は皆んなさう云つてゐたよ。」

約束が違ふ

海に面して低くなつてゐる。そして海岸に近いので浪の音が絶えず騒々しく響いて來るのである。海から吹いてくる潮風が殊の外に強い所であり恵まれた土地と云ふ事が出來ない有様である。さて最も重要な皇居は山の中に建てられてあつた。ふとその建物を見て寶明天皇の朝倉の行宮の木の丸殿もこんなものではなかつたかと思へて考へ様によつては在外に風情があつて、風變りなだけに雅致のあるものであるかも知れないと思はれた。こう云ふ新しい皇居のお有様、新しい都の状態であつた。

京都の方では毎日毎日引越に人々は忙しかつた。多くの住居は毀されては役に組まれて河を下つて運ばれるので、さしにも廣い淀河も如何にも狭い様に思はれる程役で一杯になつてしまつた。この様にして多くの家が福原へと運ばれてゐるのであるが、福原の土地を考へて見るとこちらから送られた程には家が建つてゐないからまだまだ空いてゐる土地が多くあつた。建ててある家の数は少ししかない。一體あれだけ、河幅が狭く見える位に送られた家は何處に建てられるつもりか又何處に建ててゐるのか一向に見當も付きさうにはないのであつた。

京都は益々、日々と荒れ果てゝ行く、そして新しい都福原が都として完備するにはまだまだ日數が必要なのである。こんな時勢の間に住む人々の心持の落ち着から道理もない。まるで青空に浮び漂ふ雲の如くに風の間に間に動いて眞に不安定そのもの、人々の心は暗かつた。元から福原に住んでゐた人々は新しくお天子様と一緒にやつて來た官人達の爲にその土地を奪はれてしまつて嘆き悲しんでゐる。又新しくやつて來たそれらの官人達は自分達の住家を建てなくてはならないので、その面倒な仕事の爲に苦しんでゐる。どのみち好ましい事どもではないのである、ふと往來を行き交ふ人々に目をやつて見ると牛車に乗るべきである所の貴い身分のものがそんなものには乗らずに馬に乗つたり、衣冠布衣を着てゐなければならぬ筈の大官人達は新興の勢力に媚びて武家の着る筈の直垂などを着て大官人の優美な風俗を無くしてしまひ、そうして遂には都らしい優美に、雅致のある風俗は見る見る中に無くなつて唯もう田舎めいた荒々しい武士と少しも變る所のない眞に情けない有様となつた。(續)

母親「何んだつてお兄ちゃんのくせに妹を泣かすの」
子供「だつてね、僕等アダムとイブごつこをしてゐたんだよ。イブはアダムに林檎を喰べると云ふんでせう。ところがイブの奴が僕を誘惑しないで、自分でむしやむしや林檎をたべて仕舞つたんですもの。」



熟考を要す

妻「山田さんが私のこと、近頃瘡てとても様子が良くなつたつて云つたけど、貴方どう思ふ。」
夫「さあ、よく考へてから返事をしやう」

俳壇

大田 耳動子



新宮市 奥村 映水

大いなる雲の陰あり春の海

評「大きい」と云ひ「小さい」と云ふや

うな表現は、かなり概念的ではあるが案外我等の感情を表はすのに役立つてゐる。従つて、かなり用ひられてゐる。が矢張り、いゝものはいゝ、此の句も成功してゐる側の句であると思ふ。煙れるが如く、透けるが如き、ふんわりした雲を想像し、其の陰だけを泛べてゐるに過ぎないけれど立派に春の海を思はせる。

北海道 竹岡 昇全

わだつみに觸れて暮れゆく霞かな

評 既に暮れてゐる「わだつみに」に霞の裾が觸れて次第に暮れてゆくと云ふ、如何にも穏かな春の夕暮の光景が無理のない表現によつてものされてゐる。「觸れて」がよい。

青 森 鈴木 白舟

ゆく舟はゆきて風波ぬきかな

評 春の目永を思はする句である。「ゆく舟はゆきて」と云ふ表現に依つて景色はよくわかる。が然し此の表現は、どちらかと云ふと此の風波の温さを思はする

爲めの常套手段に使はれてゐるところが無いでもない。慾を云ふと「風波温きかな」だけでがっちり表現して呉れたらと思ふ「風波」がよい。

下諏訪 久保田 穰

緋の紐の一筋かゝる屏風かな

大 和 奥田 秋郊

春寒き村の道端の風の音

三 重 岩田 諦眞

夕暮は蚊も鳴き出でぬ涅槃像

小 倉 増谷やすを

御忌の僧子に教へをり合掌を

山 口 長岡 健一

背の兄の兄よりひろき脍の顔

同 長岡 見地

青竹を春雨青う傳ひけり

和歌山 白枝避路子

若草や蹄の跡をとび／＼に

會 津 齋藤 華舟

薪を切る山に辛夷の花盛り

— 稱名に籠りて —

たらちねの母に抱れし春ぬく

三 重 税 岩子

お雛様にあざなつけた人逝きぬ

青 森 七戸 木賊

幌あげて風をいれたる櫓の酔

東 京 加藤みゑ子

春泥や脚長蜂のうづもりて

神奈川 土井芙蓉子

湯氣たてゝ栗のお鏡地神講

同 村田 柳村

大わだの朝焼かゝり縁立つ

弘 前 矢川 テイ

鶯に春めく障子あけにけり

宮 城 豊歳 月巴

丘に出てにはかに寒し梅の花

東 京 富澤 逸艸

流れぬしうたかた一つ春の泥

同 長谷川夏彦

音頭とらば五人囃子のはじまん

同 古市告天子

フレイムの障子にふれて櫻草

同 鈴木 可折

つばくらに籬の竹の新しく

兵 庫 楠田 英子

お水とり今宵も寒き風の音

神奈川 岸 弘竹

春雨の雫つくりて枯枝かな

岩 手 古澤 五葉

雪しん／＼寺の一日客もなし

神奈川 新堀 櫻水

垣の陰爽やわらかく踏みにけり

同 金子 雅子

山焼くところがり走る石のあり

大 鰯 相馬 照子

見つむれば險つめたし寒の月

東 京 加藤 章治

春泥やバスに乗る人外の人

同 須田 曉鐘

きさらぎの或日金ペン賣りにけり

青 森 鎌田 鳥時

水門のほとりに出でし土筆かな

神奈川 矢島 吟石

自然薯の太きところで折れにけり

東 京 戸村 重治

菊枯れて貧しく時計きざむかな

青 森 岡山 正一

春泥にカンテラ下げて検車かな

同 鴨澤 昇

幹太き枯木に荒るゝ吹雪かな

東 京 安武紅陽子

玉川に來て暖かき流れかな

青 森 藤本 博

春雨の音立てゝ來て暗くなり



空

(その二)

——日本人の生活から——

眞野 正 順

音楽の「間」

だいたい畑道ひになるが、音楽の世界を覗いて見まじやう。

日本の音楽で、一番難かしいのは「間」だと言はれてゐます。

「間」といふのは、曲と曲との間にちよつと、息を切つて中絶するあのしばらくの間です。このしばらく前曲を切つて、また後曲に移つてゆく休止の時間は、何事でもないやうに見えて、實は非常に難かしい。この氣合ひ一つで、前後の曲は生き／＼とした一種の弾みを生じて、全曲流るゝ如く滑かに進んでゆくが、この氣合ひ一つ誤ると、前後の曲は、まつたく、取り返しのつかぬほど死んでしまひ、全曲めちや／＼になる。謂ゆる「間が抜け」てしまふのです。

然も、こればかりは、習つて習へず、教へて教へられぬところとされてゐます。曲節の抑揚變化ならば、一心に師に倣つて練習を重ねて行けば、ある程度までは達する事ができる。これ

ばかりは、一つの生きたコツとでも言ふか、自得をまつ外はない。ほんとうに、この自分が其曲の精神の中に生きてこなければ體得できない。それに自分が融合し、全體と一つになつて流れてゆく時、おのづからに企まずして出てくるもの、言はゞ名人上手の境地です。

——ところが、洋楽を聴いて見ますと、この「間」といふものが、殆んど無いと言つていい。それは、あの曲節のさまざまなる變化の間には、或は、絶え入るばかりに消え細るとき、或は、萬象はたと音絶えた嵐の前の静けさ、或は、進撃の勇ましい弾みをもつたテンポの間、なぞには、やはり音律の絶え切るやうな處が挟まつてきますが、然し、洋楽は、その原則として全く音の絶え切る空白を、その樂律の中に容れておかないものです。ですから耳を傾けて靜かに聴くと、ほとんど音の絶え切つたやうな處でも、かならず何處か、あるかなしかの幽かな旋

律が、餘韻のごとくそこに流れてゐる。全くの空無といふものは無い。

それは丁度、さきに述べた洋畫の氣持を思ひ出させる。洋畫の畫面は、ずいぶん色彩の薄いやうな處でも、必ず何等かの色で埋めつくされて空白はなかつた。その様にまた、洋樂は、その奏せられてゐる間、かならず、何等かの音がいついて、空無な瞬間はない。つまり洋樂は、その全曲すき間のない不斷の音の連続です。

ですから、その結果として、洋樂はその聴者を息つく間もなく壓倒的に支配してゆく傾きをもちます。曲の奏されてゐる間、そこを領するものは、たゞ指揮者の揮ふタクトの動きと共に操つられてゆく感情であつて、聴者は、否も應なく、それで吸ひ込まれ引ずられてゆく。いはゞ獨裁的支配の音樂です。

このやうな音樂に慣れた耳から聴くと、邦樂は、いかにも空白が多くぼつりと中断されるので、間だるこしい。ところどころ一休みしながら、單調なメロディを倦かず繰返してゐる退屈極まるもののやうに思はれる。

それなら、一體どこに、邦樂の「間」は意味があるのか。——こゝにまた實は、東洋の深い精髓がひそんでゐるやうに思はれます。

一曲の音樂が奏し始められるとき、それが名手の手になるかぎり、聴く者は、かならず、その妙なる音調の中に、全身をあ

げて引込まれてしまふ。そうして幻のごとく、曲律の高低のまに全身を任せて共に流れてゆくのですが、邦樂では、その時、曲極まつてふと音の絶えた虚無の「間」が現はれる。

これは微妙な瞬間です。このとき、聴者は「ほつ」と一休みしたやうな氣になると共に、この「間」は、奏樂の方では中断されて空白になつたが、聴く者の耳の中では中断されてゐない。今迄自分がそれに満されてゐた樂音によつて醉された心持がまだ残つて流れてゐて、そうして此のもう何にも聴えない空白の時間を自分で埋めてしまふ。つまり、聴者は自らの氣持によつて——形なき音樂を自ら奏しながら、この空白の「間」をつないでゐる。

そうしてゐる内に、その氣合を計つて、次なる音律がふたゝび翻曉として奏でられ初める。すると、今迄たゞ自分の餘情にひたつてゐた聴者はふたゝび鮮しく振立てられ、新しい次なる音律の中に、融け込んでゆく。

すなはち、邦樂の「間」は、それが「空無」なることに依つて聴者自らが、この一瞬の音樂の中に自ら参加してゆく機會となる。そうしてその度毎に、鮮しく振立てられながら、次第に奏者と聴者が連れ合ひ、一如となりながら、その樂の終結にまで運ばれてゆく。

であるから、邦樂は、さきの洋樂のやうに奏者が一方的に、聴者を支配してゆくやうな征服的な音樂ではない。そうでなく

て、この音楽は、むしろ奏者のみならず聴者すらもが、暗黙の間に伴に奏で、伴に楽しんでゆく和諧の音楽である。こゝに著しい邦楽の特色がある。

このやうに、聴者も知らずその中に共に奏せしめられてゆく和の樂で邦樂がある事から、また日本に産出した音楽は、たゞに専門家だけの私占物とならず、常に聴者大衆の口づさみ儼ひゆく傾向をもち、その愛好される曲目にしても、全く大衆の力能から超絶してゐるやうな専門曲でなくて、何時も大衆の口づさみ儼ひ得るところのものが繰返し倦かず愛好されるのである。

——音楽のことに就ては、私は、全くの素人であるから、これ以上、立入ることは出来ない。然し兎に角、上の如く言はれてゐることは、私共に何を語つてゐるのであらうか。邦樂の無比なる特色として、奏者も聴者ともに一如になつてゆく、その融合の機會は、その處々に差しはさまれる空白な「間」であつた。

こゝにも、私達は、日本人の生活の中に、「空」が驚くべき働をなしつゝあるを見るのである。

× × ×

「空」と云へば、掴みどころもない空虚のやうに思はれる。そんなものが、どうして私共の生活に必要なのであらうか。一寸思へば、そんな氣がするのであるが、そう思ふ事は、やがて現

今の私共の頭が既に餘りにも歐米流の考へ方に蔽はれ、東洋古來の眞理「空」の正しい意味を見ることが出来なくなつてゐるからである。

まことに生命を活かすものは「空」である。人は「空」を其生活の中に持つことに依て、初めて躍々として自己眞實の姿に生き出づる事ができる。

その事は、すでに歴々、擧げ來つたところで明らになつたと思ふが、然し今迄擧げ來つたところだけでは、實はまだ「空」の本當の意味が現はれてゐないのである。これ等は、むしろ此の生命動作の傍らに在つて、それを助けてより善く生かして行くといふ程度に出てゐない。「空」が、その眞實の尊さを、この生活の中に現はすのは、進んでこの生命そのものの中心が「空」になり切つた時である。

人間が、眞に自からに生きる爲には、この生命はその全體をあげて「空」の世界に投げ込まなければならぬ。この生命の働きが、白熱して澄み透り「空」となり切つたとき、はじめて崇嚴無比なる生命の力は躍動してくる。

それは、何ういふことか。その事はまたわが日本人の生活の中に美事な典型をなして現はされてゐます。

劍法の極意

徳川初期に現はれた傑僧、澤庵禪師が、親しく筆を染めて劍法の秘奥を説き、當時の劍宗、柳生但馬守に與えられた一巻の

書があります。「不動智眞妙錄」と名けられてゐます。この書は以來、武道最奥の聖典と呼ばれ、あらゆる武道の眞髓の根底となり、諸流諸家さまざまに變れど、その秘傳奥義は、畢竟この書の内容以上には出たものはない。極めて重要な典籍です。

そこには、何んなことが書いてあるか。

劍の世界は、切迫つまつた生死必殺の時機です。氷の如き白刃を抜き放ち、互に息を凝らして、必死になつて相向ふ。その凄絶極まる瞬間に、機動わずかに動くと思へば、閃光、電のごとくひらめいて、忽ち、一方は血を吹いて斬り倒されてしまふ。

この身の毛もよだつ必殺眞劍の世界においては、たゞ平常の力餌だけに頼んでゐられない。この時に面して、心亂れて臆すれば、忽ち平常の技は萎へ、その虚をつかれて斬られてしまふからです。それ故、武士は常に、この眞劍の刹那における精神の鍛錬にさまざまと苦心したのです。

「心を何處に置かうぞ。敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるゝなり。敵の太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取らるゝなり。敵を切らんと思ふ所に心を置けば、敵を切らんと思ふ所に心を取らるゝなり。我が太刀に心を置けば、我が太刀に心を取らるゝなり。われ切られじと思ふ所に心を置けば、切られじと思ふ所に心を取らるゝなり。人の構に心を置けば、人の構に心を取らるゝ、兎角、心の置處は

ない。

心を何方にか置かんとすれば、心はかならず、それに傾き、注意はそれに奪はれて、他の全身の力は脱けてくる。そこを狙つて打込まれれば、もう晚い。打たれてしまふ。

そこで或者は言ふ。「氣を臍下丹田に押込めて、餘所にやらずに、立向へばよい。」と。これは一應尤もな様であるが、今度はその臍の下が氣にかゝり、それに心が奪はれてしまふ。

「臍の下に押込んで餘所にやるまじとすれば、やるまじと思ふ心に心を取られて、先の用がけ殊の外不自由になる。」それならば、何處に置いたらよいか。

「右の手に置けば、右の手に取られて身用の用缺けるなり。心を眼に置けば、眼に取られて身用の用缺け申候。右の足に心を置けば右の足に心を取られて身用の用缺けるなり。何處なり」と一所に心を置けば、餘の方の用は皆な缺けるなり。

何れに置ても、ことごとくに心に心を奪はれてしまふ。心を一所に置く事が悪いのだ。それなら、何うすればよい。忙しく八方に氣をくばつてゐればよいのか。その様な事をすれば、素より亂れ勝の心はいよく亂れて、混亂し全く心の落着を自ら失つてしまふ。

こゝに到ると、最早、平常の思慮分別では駄目である。平常の思慮分別は必ず、何かに取つかねば、心は落つかないからである。本當の心構へは、かゝるものを振捨て、しまはねばなら

ぬ。澤庵は譬をあげてこゝを説明してゐます。

それは、譬へば、一本の樹を見るやうなものだ。樹には数知れぬ木の葉をつけてゐるが、いま其中の一つの赤い葉だけに氣を留めて見てゐれば、残りの葉は何時か見えなくなつてしまふ。ところが、別段、一つの葉に心を留めるでなしに、何心なく樹に向つてをれば、今度は、不思議にも、その数知れぬ葉が悉く眼の中に映つてくる。

まこと、木を見る者は森を見ず。葉を見る者は木を見ず。

眞によく全體を見んが爲には、先づ、この見んとする心を放ち捨てねばならない。見んとする心を捨てる時に、心は偏りを捨て、正しく、全體の姿は歴々として現はれてくる。劍法もまた、然うである。

『何處にも置かねば、我が身に一ぱいに行きわたりて、全體に延びひろがりてある程に、手に入る時は手の用を叶へ、足に入る時は足の用を叶へ、目に入る時は目の用を叶へ、其の入る處々に行きわたりてある程に、其の入る處々の用に叶ふるなり。萬一もし一所に定めて心を置くならば、一所に取られて用を缺くべきなり。思案すれば思案に取らるゝ程に、思案をも分別をも残さず、心をば總身に捨て置き、所々止めずして其の所々に在て用をば外さず叶ふべし。……何處に置かうとて思ひなければ、心は全體に伸び擴がりて行き渡りて有るものなり。』

すなはち、心を何れにも置かず、心を放つて「空」となればその空となる事によつて、心は全身に満ち／＼て一分の隙間もない、自在闊達の世界がひらけてくる。そうして、

『打太刀を見る事は見れども、そこに心を留めず、向ふの打太刀の拍子合せて、打たうとも思はず、思案分別を残さず、振上ぐる太刀を見るや否や、心を卒度止めず、其まゝ付入りて向ふの太刀にとりつかば、我を斬らんとする刀を、我が方にもぎとりて、却て向ふを斬る刀となるべく候』

即ち、己れが全く「空」になり切ると共に、流るゝ水の如く敵の力をそのまゝに、此方にもぎり取つて、還つて發止と敵を打ち落すこととなる。

この消息をまた、かの近世の名人伊藤一刀齋も言つてゐる。

『勝負の要は「間」なり。我利せんと欲すれば、彼も利せんと欲す。我往んとすれば彼亦來る。勝負の肝要この間にある。故に我傳の「間積り」と云ふは、位拍子に乗ずるを間と云也。敵に向て其間に一毛を容れず。其危急を顧みず、速く乗て殺活の當的よく本位を奪ふて至るべき者也。若し一心間に止まるときは變を失す。わが心間に拘らざる時は、間は明白にして其位にあり。故に心に間を止めず、間に心を止めずよく「水月の位」に至るべき者也。一刀齋先生劍法書』
これは一毛も容れざる瞬間。すなはち、それに乗るのである。然し、この一瞬に聊かなりと心が停滯すれば、たちまちそ

の瞬間に機を失してしまふ。思慮していかず、分別していかずたとへば、掌を以て互に撃つとき、打つ掌の間に髪毛をも容れざる瞬間、たちまちハッシと音の出づるが如くサツとかゝると其まゝ流るゝ如く動きゆく。然もそれは、たゞ速くといふ意味ではない。心が物に止まらず、早川の流に乗つた玉のごとくに宛轉として自在に移りゆくのである。

然し、こゝに注意すべきは、かゝる原理きへ心得ておれば、それで直ちに此身がその様に石火の働きをなし得るかといふと然うではない。

「理の修行、事の修行と申す事の候。理とは右に申上げ候如く、至りては何も取あはず唯だ一心の捨てやうにて候。段々右に書付け候如くにて候。道理ばかり胸にありて身も手も働かず候。事の修行と申候は、貴殿の兵法にてなれば身構の五箇に一字のさまゝの習事にて候。理を知りても事の自由に働かねばならず候。身に持つた刀の取まわし能く候とも、理の極まり候所の闕くは相成るまじく候。事理の二つは車の輪の如くなるべく候。」

心を空にすべしと言つても、漫然とたゞ心を抜いてゐるだけならば、全身に力が抜けて忽ち斬られてしまふであらう。こゝに言ふ「空」は、そんな理屈だけの空でなくて、事實生活の中から躍り出してくる空である。「生きた動的な空」とでも言ふかそれを現はしてくる爲には、かへつて、武道に鍛錬を積み、苦

辛を重ねたあげくでなければならず、全身殺氣に張り満ちて一分の隙も無きまでに充實した極致において、やがて驟然として現はれてくる森嚴なる「空」である。

それは譬へば、かの自然の火に似てゐる。火はその極熱に達するや、赤き焰はやがて變じて白色となり、遂には、水の如く無色に透つた澄明な焰となる。この焰は一見この大氣と變ることなく透明に澄んでゐる。然しながら、そこには一切の熱氣がはち切れんばかりに張り満ちてゐるのであつて、物觸るれば必ず瞬間にして燒きつくしてまふ。劍道の空もまた然うである。それは積年鍛錬の極致、たとへば、極めて急速にめぐる獨樂が、寂然として宛かも靜止せるかに見えるが如く、一分曇るところなき空寂を、そこに湛えながら、物觸るれば忽ち迅雷石火の働きが迸り出づるのである。

——然も、これはまた、あくまで「空」でなければならぬ。鍛錬の極修行の極、あらゆる精隨をその身に集めつゝ、然も、今は何等の工夫思慮をも殘す處なき無心無刀の「空」とならねばならぬ。その積める一切の力を自在に急速に、萬機に應じて發動し得べきがためには、一切の念は捨てられて、透明一糸も留めざる空の世界に居らねばならぬ。この全身をあげて、その中に脱落し來らずんば、その積み得たる武力の一切は自在に用ゆる事が出来ないからである。(次號完結)

住^{ぢう}
蓮^{れん}
と
安^{あん}
樂^{らく}

飯田 光明
西田 惠泉 畫



一、敗戦の日

どつと倒れた拍子に、後に續いた徒歩の武士達が、將棋倒しに覆ひかぶさつてしまつた。信國はもう起きる氣力を失つて、ぐつたりと伸びてしまつた。ド、ド、ド、地肌を踏み荒して、無數の足がす速い交錯になつて過ぎて行つた。味方の總隕れである。

脊と云はず、腰と云はず、具足をつけた重たい足が、何度も何度も踏みつけては這つて行つた。霧が降つてゐるやうな、すつと晴れて消えて行くやうな、妙な思ひが感ぜられる他には、何も見えない目に、抜き身の太刀だけが白く見えるのである。ゴーツと云ふ山崩れの音、はつと氣がつくと、敵の喊聲であつた。

起き上らうとしては倒れ、その度にズキズキと全身が疼いて來るのである。信國はそれでも、もう一度だけ起きてみようと思つた。兩手で柄を握りしめ、血のりで這り勝な大地に片足を伸して、

「南無阿彌陀佛！」

一かばちかの稱名をひと聲としてぐつと腰に力を集めるのであつた

「念彼觀音力！」

「聞名欲往生！」

出まかせの祈りが、迷つて出るのである。

「歩ける、歩ける！」

刀を杖に、右に一步、左へ二步、それでも信國は焦々しくよろめい

て行つた。

一つの死骸を乗り越へると、二間と行かない中に、惨たらしい味方の軍馬が、主諸共に打ち倒れて、まだ死にきらない、斷末魔の苦しみ、土まみれの巨體をどく／＼と波打たせては大地を蹴り、鐵蹄を絞る哀れな嘶きを續けながらも、前脚で土を掻いてゐるのである。見れば五ツ、六ツ、七ツ、五十に餘る骸の原である。敵味方の定めなく、とび出した眼腔、斬り落された腕、血ぬられた顔、恐らくは一瞬前まで血を吹いてゐたであらう鼻、それから口、蹄にかけられて打ち割られた頭、はみ出した腦漿が三尺も四尺もひきづられてゐるのである。自分と同じやうに轉んだ刹那、次から次へと、具足の足に踏み殺された負傷兵の姿である。

頭に躓いてはよろ／＼となり、

「糞！」

度胸をきめ込んで二三歩、タ、タ、タと走ると、呼吸がつまるやうに胸板が壓せられ、立止れば凄惨な骸が映る。前にも後にも、自分一人だけが動いてゐるのだ、信國ははつきりとさう思つた。味方が何處まで退却したか、敵がどう攻めて來るのか、見當もつかなくつた。ただ、動いてゐる、自分は這げるのだ、とだけ、惘然としてゐて、さて何處へ這りつけばよいのか、それすら信國には判らないのである。盲目滅法、太刀を杖に焦々しくよろめいて行つた。

宇治、南郷の堡では思ひのほかには脆く潰れた。

義經の精銳三千餘騎、水煙を立て、馬を乗り入れたと見るより早く、一騎、二騎、瞬く中に宇治川の流を乗り切つて、とよめき寄せるのであつた。小半刻も亂戦が續いた。義仲勢は數に於ても三ヶ一に足らず、素より勝負のない戦であることを、部將も兵も知つてゐたのである。矢繼早に傳令の騎馬がとんで行つた。院の御所に屯する、義仲の膝下に駆け行くのである。遂には十騎、二十騎、傳令にこと寄せて姿をくらませてしまつた。部隊長、菅野兵六が、餓れてからは、腹巻を捨て、太刀を投げ、烏帽子もかなぐり捨てて散り失せる雜兵。信國もこの中の一人であつた。

それが昨日のことである。

あのまゝに遁れてゐたら、重ねてこのやうな憂き目は見ずに済んだであらう。ふと信國はそんなことを思つた。伊勢から連れ立つて出た、たつた一人の話し相手は、もう昨日の戦に散つてしまつたらう。義仲に何の恩顧があつて此の戦に出て來たのか、今更自分の愚かさに泣いてくるのである。血氣に逸つて雜兵に志願した自分、たゞ、戦そのものに興味を感じてゐただけのことである。生きてゐる、俺は生きてゐる——おど／＼とした、ものゝ氣に憑かれてゐるやうな心の隅で、生きてゐると云ふことだけが、明瞭な意識となつてゐた。

何處をどうさ迷うて來たものか、信國自身覚えはなかつたが、足に冷たくもつれるのは大湖の水であつた。

朝からの血腥い情景は何一つ見當らず、濱は限りなく續いて、水

が足元を洗つてゐるのである。比良の白い峰々が神々しいものに見える。自然の冬の姿であつた。

信國は初めて、異様な自分の身なりに氣がついた。

胴丸の紐は切れ、直垂を失ひ、手細、半首、具足の悉くが泥まみれなのである。それにもまして、衣はずた／＼に引き裂かれ、冷たいと思つて手を當て、見ると、半凝結の血のりである。一時は忘れてゐた疼きが、以前にも増して激しくなり、二三步よろめくときり／＼と身を揉んだ。苦痛に堪えようとする努力が、一刹那衰へて行くのを、自分自身がもう判らないのである。意識が次第に薄らいで行くのも判らず、無我無中で太刀を離すや、波打際に崩折れてしまつた。煙が薄らいで、やがて跡形もなく消えて行くやうな虚ろさであつた。

ダ、ダ、ダ、亂れ駆けの蹄の音、際立つて聞える嘶き、人々のひしめき合ふ雜音、そんなものが溶け合つて一つの雪崩となり、三丁も四丁も人馬が入り亂れて石場の街道を京へ向つて進んで行つた。馬上の人の甲冑は緋に黒に緋しつけられ、意氣揚々と進軍して行くのである。徒歩の人々の面上にも生氣が溢れ、幾十となく立てられた旗は、風になぶられて翻翻と散り、一月の午後の光がこれ等の上に射してゐるのである。手兵三十餘騎諸共、粟津が原の水田に打ちとつた旭將軍義仲の首を京へ土産する義經の行軍であつた。

信國の虚ろな頭にも、此の騒音が聞かれた。

感謝と云はうか、感激と云ふか、たゞもう胸が一杯に迫つて涙が湧いて出るのである。半死の身をかくまわれたばかりか、この手厚い看護である。淡い光線が高い小窓から射してゐた。土蔵の中を急にとりかたづけて装束へた一間であつた。枕元に隠はれた小屏風、湯氣立てる火鉢、そしてこの褥、目にとまるもの、悉くが豪華なものであつた。どうして着替へさせられたものか覺へない中に、緋のどんさが纏わつてゐるのである。

「夢だ」

信國はどうしても信ぜられなかつた。矢張り助かつたのだ、俺は生きてゐる。生きてゐる。さう思ふとしんの底から云ひ知れぬ歡喜が湧いて來るのである。涙が溢れ落ちる。あらゆる思ひが交錯して熱い涙となり、仰臥した信國の頬を流れて落ちるのであつた。

昨日のこと、一昨日の戦、その前の日は六波羅の母と別れた日である。うるんだ目にも母の姿がはつきりと浮ぶ。萱葺の門、萱の扉、年老いた松の木が前庭一杯に擲がつてゐる。あの六波羅の家、伊勢から上洛した一月餘りを、母と二人きりで暮したなつかしい家の輪廓。疲れ切つてゐる腦裡を、疲れ切つてゐるために、様々な淡い記憶までが浮んでは消え、消えては又すつと閃いてすぎるのである。千切れ千切れの淡い雲が、凝結した冬の高い空に、どんよりと浮んでゐるやうに、幼い頃の思ひ出が次々と擲がつたり、そして折角その美はしい雲と遊んでゐると意識する瞬間には、昨日の修羅場がまざ／＼と再現



して、その度に激しい悪寒が全身に傳はるのである。狂はしい瞬間が重なつて行く度に、信國の形相が變つて行く。それが信國自身にも抑るやうな氣がするのである。生きたいと希ふ執着、氣力が刻々と衰へて行くのと反對に、無精に生きのびたくなつてくるのを感じながら、信國は矢張り駄目だと思はずに居られなかつた。石場の濱で、假死した時の、あの虚ろなひととき、死んで行く、死んで行く、と思ひながら、とう／＼睡魔のやうなものに誘はれて行くあの感覺、それが今又襲つて來てゐるのである。仰臥したこのまゝの態で、暗い坑の底へずんずんと落ちて行く心地。合掌に構へてゐた兩手が崩れかゝる。信國は靜かに掌を組み改めて眼を閉ぢた。

「南無阿彌陀佛！」

母の朝子から聞き覺えた稱名である。三度四度、度重なるにつれて微かに、不思議にも重みをまして只譯もなく稱へ出せるのであつた。十七年のあひだ、信國と呼ばれた肉體が「信國」の精を失つて、燃えさかる青春を乗せたまゝ、亡んで行く姿であつた。

二、黎 明

青木庄左右門の館は驚くばかり廣壯なものであつた。名にし負ふ土地の豪農なのである。栗津ヶ原を前に見て、一段と岳高き松のしげみに、點々と散らばる屋棟白壁、青木庄左右門の屋敷である。

壽永三年二月の吉日、朝まだき頃から今日はとり分けて人の出入が

激しかつた。めでた芽出度の歌聲がしきりなく流れる。人々の館には云ひ知れぬ喜びが溢れ、一様に染め抜かれた印緋纏の若い衆達は、分けても酒氣に元氣な唄聲をまき散らすのであつた。白黒に染め抜かれた幔幕は、門から石疊の兩側に張り巡らされ、それが植ゑ込みを縫つて敷臺にまで續いてゐる。眞新らしい無數の高張り、掃き清められた砂子、さんざめきはその奥から湧いて出るのである。

芽出度めでたよな、主が娘は

君に抱かれて夢結ぶ

栗津の松に旭がかげりや

院の五七の花かほる

宴は愈々酣に、何時果てようともはかられない。次から次へと新しい唄が咽喉自慢の人々に移つて行く。青木庄左衛門の娘、更科が、院の小御所に宮仕へする芽出度い日であつた。

信國はもう落ちついては居られなかつた。血潮が狂はしくたぎつてくるやうに思へるのである。この同じ屋敷に此のさんざめきを聞きながら、どうしてこの心の痛手を癒すことが出來よう。木卓の花の香は、雨の日にこそ惱ましいものである。

敗戦の日から一と月餘り、住みなれたこの土蔵の一室に、昨日も今日も一人信國は痛々しい彼の戀心をもてあぐんでゐるのである。同じ思ひ出が何度でも彼の胸裡を去來するのであつた。總て生々しい更科の姿であつた。幻のやうでもあり、夢のやうにも思へる。分けてこ

の四五日と云ふもの、特に髪形を製へて思案げに庭に佇む更科の姿を見た。その度に圖々しくも自分の心を躍らせてゐた信國である。

彼のこのやうな惱みを誰が知らう。更科自身思ひもよらぬことである。一と月餘り、同じ屋敷で毎日顔を合せてゐても、信國は敗戦の身を養ふ居候である。客人とまでもゆかず、土蔵の一間に起き伏しては、人目をさけて身を養ふ若者にすぎない。更科が何を感じよう。

さんざめきは愈々酣である。

——更科どのが院の小御所へ——

今の今まで知らなかつた事實だけに、信國の失望は大きかつた。細い絹糸が胸に巻きつき、それが一呼吸毎に肉に食ひ入つて行く思ひである。忘れようとすればする程、激しい戀心は千々に碎ける。その度に一つ一つの破片がバツと火花を散らして、狂ほしくたぎる血潮の中に消えて行く。所詮はどうすることも出来ない片思ひの苦惱である。

昨晚は夜の更けるまで、悶々と傷いた戀心を抱いてゐた信國である。その信國が、朝まだき京の街に佇んでゐようとは！

信國は夢に夢見る心地であつた。一と月餘りの中にあらゆることを経験して來たやうな氣持がするのであつた。六波羅の母を訪ねてはるばる伊勢から上洛して來た去年の秋、それからどれだけの月日が経つてゐよう。

三條の橋の欄干に兩肘ついて、滔々と流れる加茂川の黒い水に目を落してゐる。猪突的な蠻勇の記憶が次から次へと湧いて出る後には、

慚愧の想がひし／＼と身をせめてくるのである。

實際、義仲の士卒は我がもの顔に都大路を闊歩し、三人五人打ち連れては軒並に荒してすぎたものである。木曾に生れ、木曾に育つた荒武者達は素よりのこと、新參の雜兵までが強請強盜を働いて廻つたものである。

女と云ふ女は身を護るに競々とし、『娘供養』の符が貼られると、舌をかみ切つて自害した親娘も數へる限りではなかつた。女をかつぎ出しては野山に運び、五人七人、寄つてたかつて辱めるのであつた。何故、何故義仲の軍兵などに志願したのであらう。自分だに解せかねることであつた。母が涙の諫言も聞かず、十七歳の若さがさせた愚出會頭に太刀を交へるのである。盲目滅法に振りまわす太刀、

「ギヤツ！」

そして一人の兵が死んで行く。今の信國にはもう思ひも及ばぬ浅ましくも恐ろしいことであつた。去年の十月、あの室の戦で受けた全身の返り血、まざ／＼と浮び出るだけに、惡寒が全身を傳はるのであつた。

「南無阿彌陀佛」

母の朝子から訓とらづけられた念佛である。稱へずに居られない氣持から迷つて出る稱名であつた。

「南無阿彌陀佛」

すつと氣持が輕んでゆくやうに思へるのである。信國は二度三度、續けざまに稱へた。

二月の冷たい空風が霜を含んでしきりなく吹いてゐた。

茜の色が漸く東の空に冴えて來た。薄墨に塗りつぶされてゐた世界が、刻一刻に白んで來るのである。

結城どんさの着流しに太刀を佩いてゐる自分の姿。佗びしい中にも朗らかな思ひである。

——戀のとりこにはならなかつたのだ、矢張り俺は克つた、克つた——

人生試練の魔管を、見事抜けきつた喜びであつた。が、彼の足許から次々と流れて行く限りない加茂川の水、橋脚に碎けては白く泡立ち、忽ち元の姿にかへつて延々と街を縫つてゆく一筋の姿、それは拭ふことの出来ない人生記録にも似てゐる。

曉の冷々とする橋上に立つて、信國はあかずこの流れを見つめて



ゐた。過、現、未を連ねる時の流れの姿である。

善は善ながら、惡は惡ながらに泡となり、芥となつてどこまでも流れて行くことであらう。彼の思ひは千々に碎け、そしてそれが一つのはかなさに溶けて行つた。

ほの／＼ときざす心の黎明であつた。

三、現し世

音もなく警鐘が亂打せられてゐるのだ——人々もそれを感じてゐる。今日あつて明日を計られぬ不安さにおびえ切つてゐる中を、流言蜚語が降つて來たり湧いて出たりするのである。そしてそれが忽ち現實となつて現はれて來るのであつた。

骨肉相食んで鍋を削つた保元平治の戦も、京の人々にはまだ目新しいことであつた。大路々々に屯した軍兵が、ザ、ツと動き初めると、忽ちこゝ彼所から火を吹き出した。天を焦す紅蓮の焰、阿鼻叫喚のあの恐ろしい修羅場、御所の立木が生生しく燃えさかつたあの時の光景——花の都が一朝にして燒野が原と化してしまつたのである。それがまだ記憶新しいことであつた。

人々はあの時の恐怖を喚び覺してゐる。

今に再び兵變がくり返されるぞ！

此の街が火の海になるぞ！

強請、強盜が跋扈するぞ！



恐ろしい豫言であつた。人々が競々としてゐる中に、京都の形勢は刻々と危殆に陥つてゐた。義仲、行家、行朝が各々源家の旗印をおし立てて、北陸、大和、關津からひしびしと迫つてゐたのであつた。

壽永二年の七月、たうたうその時が來たのである。京の街はあわたしく明け暮れた。義仲の軍が觀山に屯したのである。夜の中に院から唐車がひかれた。

それにも増して平家の都落は哀れであつた。火を放つた館が白煙に包まれてゐるのを、ふり返へ振り返つて落ちて行つた。

幼い公達は郎黨の背につかまり乍ら、女房達は白い臍もあらはに、手を取り合つて落ちのびるのであつた。十二單、帷張の影に昨日までは戀歌を水莖に乗せてゐた女房達のこれが姿であらうとは！

先に落ちのびた平家の先發騎馬隊が、幼帝と神器を中にして、山崎街道を西下してゐた頃、潮のやうに義仲の軍勢が下りて來た。比叡の寺侍も長刀を振つて交つてゐた。

家々は堅く大戸を閉ざしてゐる。

土煙がもうくと立つ。むし返る暑さであつた。主を失つた平家の軍馬が嘶いて駆け廻つてゐた。馬を失つた平家の武將は、徒歩のまゝで味方の跡を追つたことであらう。

一祇園精舎の鐘の聲、諸行無常のひびきあり、娑羅双樹の花の色、盛者必滅のことわりを現はす。おごれる人も久しからず、たゞ春の夜の夢の如し。たけき者も遂には亡びぬ偏に風の前の塵に同じ」

あゝ、平氏の影は都から消えて行つた。

糸毛車、雨眉車のあのなつかした車輪の軋り、青、紫の糸でしつらはれた、あのみやびやかな御簾、そしてあの應揚な曳き牛の歩み——網代車の、あの黒々と塗られた金巻繪の大車輪、漆黒な大牛が毛もつやつやと磨きかけられて、太い朱房を垂れながら、もの靜かに曳いてすぎた姿——時には明笛が蕭々と車の中から流れてゐたではないか。日に幾度となく、平氏一族の公達女御が、都大路を往來したなつかしい姿である。

人々の目にはまだつい昨日のことのやうにこんな光景が浮んで見えるのであつた。

一門一族悉く高位高官にあつて、詩歌管絃の業に身をやつし、平氏に非ざれば人に非ずとまで權勢を振つてゐたあの平家——、ああ、それが今は櫛の浦の藻くづと消え失せてしまつたのである。何と云ふ悲惨な現し世の事實であらう。

室、一ノ谷、屋島、櫛の浦、人々はさうした敗戦の事實を知つてゐる。平氏が滅んだ、この事實を知りながら、人々はどうしてもそれを信ずることが出来なかつた。信ぜられないにしても、この眼前の事實をどうして否定することが出来よう。

平氏を破つた旭將軍義仲が、天下を統べて五十日餘り、又粟津ヶ原で敗亡する。そして、今は義經の殘された軍兵が京の街を横行してゐる。餘りにも急激な社會の轉運、それにも増してはかない現し世。

「今日も戦がありましたぞ」「横町に強盜が押し入りましたさうで」「内儀さんが浚われて行かれましたが」「それよりも、河原では平家の首が梟されました。可愛らしい子供も一緒に……」

寄るとすぐかうした話になり、それが次々と擴がつて行つた。あゝ、まのあたり見た榮枯盛衰の機、弓矢とる身のはかなさ辛さ、一體この先どうなつて行くのであらう。すでに人々は心の歸趣を失つてゐたのであつた。飛花落葉、雪にも月にも共に等しく泣いてみたい氣持——。

時も時、法然上人の教は滔々として流れてゐた。末世となげき、濁惡と叫ばれるこの現し世の曠野に、音高く湧き出た清らけき泉であつた。濁りを知らない泉、阿彌陀佛の大慈悲心を湛えて、遍く四散する聖淨の泉であつた。流れて行くところ、砂も土も悉く一樣に洗ひ聖められてゐる。潤ひの及ぶところ、草も木も甦つて行つた。

專稱南無阿彌陀佛！

期せずして仰ぎ見る吉水の峯、さゝやかに結ばれた上人の草庵は、日増に人足繁くなつて行く。遠近の老若男女、貴賤貧富の定めなく、上人の御法談を聴聞せんものと潮のやうに押し寄せて行つた。(未)

信 仰 相 談

中村辨康師擔當

(本欄への質問はハガキに住所氏名御明記の上信仰相談係宛のこと紙上匿名は可)

喪主にならぬのは

(問)

私達の地方にては妻が先きに死んだ時夫

としては喪主になれないのが、東洋の(と云つても支那日本等です)習慣で御座いますから、

は式に立たない風がありますがこれは、どこでもものならはしですか、又何故に立たないのですか。(京都 一讀生)

同じ風習だらうと存じます。然し近來は式に出る人もあるやうです。之は西洋流が入つて來た爲で、夫婦の愛情から東洋流の尊族卑族と云ふ氣持を超越して居るのであらうと存じます

(答)

妻が死んだ時、夫が葬式に参列しないのは、

子が死んだ時、親が参列しないのと同じ事で、尊族は卑族に對

浄土宗と眞宗と念佛

(問)

小生は眞宗の門徒であります。今日を生活して行くについて親鸞上人の御

行跡を忍んで暮して居るつもりであります。今日を生活して行くについて親鸞上人の御

行跡を忍んで暮して居るつもりであります。今日を生活して行くについて親鸞上人の御

行跡を忍んで暮して居るつもりであります。今日を生活して行くについて親鸞上人の御

(答)

第一問は今年の二月號三十七頁を御覽下さい。第二問の南無阿彌陀佛は

「南無とは歸命」で自分の命を如來様の大きい命の中に歸すこと、即ち自分をすつかりお

まかせすること、絶対信賴の意味です。聖道門と稱する自力の教でも「南無」と云ふことを

使ひますが、それは「救我」と「度我」との二つの意味で、自分の悟を開く爲めに、他の加被を頼む心から「我を救ひ玉へ」とか「我を度し給へ」とか、縁のある佛様に祈願をかけるの

佛のお稱名も同じこと故之は時代が違ふのですか。それ共どこかに違ふ點があるものでせうか。又南無阿彌陀佛は有難いと思つて居ますけれどその意味がよくわからないので大體をお教へ願ひたいと思ひます。(宇都宮市 簀利男)

で、自力を主眼として居りまして、それだけでは遅くなる場合がないとも云へないので、どなたかに御願して前から引つばつて貰はふと云ふ譯です。そうなるともう既に他力教の中へ片足入れたことになつて居ますが然しまだ本當の歸命と云ふ氣持ではなく「發願回向」の氣持の方が強く働いて居ますから、浄土教で云ふやうな氣持と似て居ても、少し違つて居ます。之れに反して浄土教の「南無」はすつかりまかせ切つた氣持です。つまり混り氣がないのです。

ところが此の氣持に就て浄土宗と眞宗と少し違つて居るやうに存じます。眞宗では入信の時の「南無」は今云つた「まかせ切る」氣持ですが、入信後は其まかせ切つた氣持にさせて頂いた有難さに御禮感謝の念佛を

信 仰 相 談

申しますこと其事が、直ちに諸佛菩薩の稱名となると云ふので、入信時と入信以後とは區別して居ります。淨土宗の方はもつと簡単に唯だ何處までも素直の氣持で「南無」とすがり「南無」とまかせ切るだけなのです。何ちらがよい悪いと云ふのではありません。どちらも本當だらうと存じます。唯だ問題は信仰に入つてからも耳四郎のやうに後から後から汚ない氣持の出で来る私達の心を反省して見ますと、随分我ながら冷汗の出る時も多いのではないかと存じますが、其時「諸佛菩薩」と云ふ

やうな高度の念佛になれるか何うか、其處に人間の悲哀がありはしないでせうか。

次に「阿彌陀」は佛の内容で「無量」と譯しますが、何事も量り無き狀態即ち一切が自由である云ふ絶對力を示したものです。で、その一切に無量でまします佛に絶對歸依するの「南無阿彌陀佛」で、その聲に私達の信仰の全部が含まれて居るのですから、大體念佛の聲をききますと、其人の信仰狀態がほゞ推察の出来るものです。不思議なものです。

このまゝ救はれて居る

問 宇宙の向上意志を本願力と感じ一切の現象を本願力に催され本願力に動かされつゝあるものと仰ぎ

ますならば伊藤證信師の無我の愛こそ徹底したものではないでせうか、一切はこの儘救はれてゐると談じ何等の努力も

いらぬつまり念佛もいらぬもうすでに救はれてゐると語るのではありませんして淨土教諸宗よりはつきりしてゐるやうであります。が如何して既成淨土教は否定し去るのでせうか私は解決したいと思ひます。(荏原區大和田義隆)

答

如來様の御慈悲は無論「無我」でありまして、差別待遇はして居られぬ筈です。そしてまた如來様の「救ひ」は十劫の昔に既に出来て居り、誰彼の差別なく「よかれかし」と恒に光被して居て下さいます。

だから「此儘で救はれて居るのだ」と本當に心に感じたなら、すぐ其喜びからでも「南無阿彌陀佛」と如來様の御名を呼ばずには居れなくなる筈です。つまりそこに改められて行くものがある筈で、若し本當に如來様の

の御慈悲が判つたら、少しでも如來様の子として、如來様の御心に添つて行く氣持があらねばなりません。

私達人間同士の間でも親となり子となつて居れば、其子の爲め「よかれかし」との親の慈悲は常に其子の上に加へられて居るのですから、親の救ひは其子の生れた時、既に約束づけられて居ります。然し其子は「此儘でよいのだ」とノホホンに構へて悪い事の仕放題をして、少しもよくなつて呉れないならば親としては何んなに悲しいこととせう。それは親不孝者でありますから、場合に依ては叱りもさせうし、罰も與へられるでせう。

如來様と私達との關係もそれと似て居りまして、私達が「此儘でよいのだ」と少しもよくなれずに「ヤクザ者」の儘で居

信 仰 相 談

るならば、まだ本當の親の慈悲を知らない放蕩息子ほうたうしこの類でありまして、始終如來様の御心を痛めて居る譯です。だから六道に輪廻させられて叱られてばかり居るのでせう。それは「親の慈悲は當然だ」と思つて、いつでも親の脛を噛らうとして居る祿でなしだからであります。こんなものが「信仰ある人」と何うして云はれませう。

元來「智慧」と「慈悲」とは表裏の相違であります。随て「正義」と「恩寵」とも表裏の相違であります。だから如來の恩寵に預るところ、こちらとしては正義に立歸らねばなりません。即ち信仰に入ることによって自分の力で出来なかつた「捨邪歸正」の出来るのが、如來様の恩寵であります。それを如來の恩寵を受けて居るのだから、何時までも甘えて鼻たらしで居

てよいと云ふ法がありますか。「この儘教はれて居る」とは如來へ歸命する時の氣持でありま

すのに、それを日常生活の問題にまで引伸して、存氣に「何等の努力もいらぬ」と云ふ我儘勝手な状態で居て差支へないと云ふことに持つて來るのならば、云はゞ信仰の「出来そこない」であります。

こんな「出来そこない」を徹

達だけになつたら、家もつぶれませう、社會も混亂するでせう、國も亡びるでせう。そんなつまらない徹底があるでせうか。

伊藤さんにしても恐らくそんな風には云つて居られないでせう。信を立てる時の問題と信の中に生活する時の問題とを一緒にして、我儘生活の言遁れの口實になるやうに考へるのは、却て如來様の御慈悲を冒瀆す

るものです。救ひは元より「無縁の慈」を以て既に成就されて居ります。レールは敷かれ列車は運轉して居りまして、それに乘らねば目的地へ運んで呉れません。私達が「佛の慈願に乗る」か「乗らない」か、其處に私達の信仰に立脚する生活があるか、或は唯だ概念だけで終つて居るかの違ひがあらうと存じます。



ノーシンのいいところは服む……スツと痛みが消える同時に、頭の疲れを恢復する……この二つです

而かも胃腸等には勿論、安全で、連用すれば頭腦ばかりか、心臓迄も強補する効果あり。これでこそ完成せる模範的頭腦薬と稱せられる所以！

頭の痛みと疲れに



十三銭・十五銭・一円・二円



隨筆 祖 父

井 上 春 子

祖父が死んでからもう二十年になる。死んだ時八十三であつたから、今生きてゐると百と三つになるわけだが、その時でも長壽を全ふした方で、だれからも、「大往生だ、大往生だ」といはれたくらひである。

凡そ長生きする人がさうであるやうに、祖父の日常生活も、いはば、きちんとした、無駄のないものであつた。それだけに私などにもむしろ親しみにくく、こはい人であつたが、世間の人の尊敬を受けてゐたわけはよく

分るのである。

しかし、きちんとした人は多く變つた人で、祖父なども、どちらかといへば、この變人の部類に入るだろう。

會津藩に生まれ、維新後はも早や世間的出世は望まず、たゞ自分の屋敷と家族を清潔に守ることで満足して生涯を終つたらしい。

中肉中骨、白髪で、鼻の高い眉の間の遠いそして無口な人であつた。禮儀作法が正しく、いつも木綿の着物を折目正しくき

ちんと着けてゐた。そして、廣い屋敷の廻りを屢一つ残さず掃除することを重要な日課の一つとしてゐた。そんなわけで、屋敷内の空地は私達小供のいゝ遊び場所であつたが、そして折角掃除の行き届いたところも無残に踏み荒されることが多かつたが祖父はそれを決して小言いはなかつた代りに、私達はその荒した跡をまた元の通り綺麗に片づけたものだつた。それは自分達で片づけなければ申譯ないやうな氣がしたのだ。

家庭メモ

レコードの回轉數

蓄音機のレコードは廻る速さがちやんときまつてゐるもので

す。これより速いと調子が上り

遅ければ調子が下ります。ほど

よい廻轉の速さは一分間に、ビ

クターとコロンビヤが七十八

回、ポリドールが八十回です。

これを合せるには、レコード

と廻轉盤の間に小紙片をはさ

んでおいて、それが一分間に廻

る數を算へれば良いのです。

貝に泥を吐せる法

あさりやしいみなどの泥を吐

はせるには、普通鹽水につける

やうですが、前晩から貝を入れ

てある水鉢の中へ庖丁などの

金物を一緒に入れておくと、す

つかり泥を吐きます。蛤でも

さういふ祖父が、芝居や活動その他の享樂を何一つ求むるはずはなく、また、一寸の糸一枚の紙も無駄なく保存し、使ふといふ節儉家であつた。見やうによつては非常な、ケチンボであり、また屢々さういはれたやうであつた。しかし、そのやうな非難は當らない、またそのやうな非難にはびくともしない一つの高い生活信條が祖父の全性格を貫いてゐたやうに思ふ。例へば、往來に無駄にころがつてゐる石ころは必ず拾つて來て屋敷の一角に積んで置いた。しかし、それは決して私する爲でなく、附近の道路や溝などの破損した場所の修繕に充てるためだつた。

自分の生活は極度につめても公の義務や公德をそれに逆比

例して重んずるといふ風だつた。納税通知が來ると、必ずその翌日までには税金を納めに行つたもので、市役所の模範納税者だつたといふことだ。また、選挙の時など、候補者が戸別訪問に來ると、その丁寧な挨拶に却つて恐縮して、こちらが代表としてお願ひしなければならぬのに、それでは——と、平身低頭して、その訪問者達を煙に巻いたといふ語り草が残つてゐるくらひだ。

そのくらひだつたから、世間並以上の神信心は怠らなかつたやうで、朝夕のお参りはもちろん、月と廿八日には一里近くの八幡様へ参拜を缺かさなかつた。それよりも、私の記憶に鮮やかなのは、家の中に佛像が所せまく列べられてあつたことで

だれか「まるでお寺のやうな」といつたくらゐである。古道具にある佛像だけは惜しみなく買つて來たやうだつた。信仰心からか、一種の趣味からかは分らない。そのどちらからでもあつたらう。私としては、むしろそのくらゐの趣味を祖父にもたせてあげたい氣がする。その方が憶ひ出の中の人にしても何となく人間としての親しさを感ずるからだ。餘りにはめをはずさない過ぎる祖父は今でも私がこはい人なのである。

それでも近頃のやうに身にしみて佛の道をきくことが出来るやうになつた私としてはこの祖父とあの佛像のある部屋でしみじみとこの道を悟り合つてみたといふ、時々思ふことである。

あはびでも赤貝でも同じです。手をきれいにしておくには、外から歸つた時、御飯の前、おやつの前などには必ず手指をよく洗ひなさい。一番いゝのは、アルコールを脱脂綿につけて、手のあちこちを十分にこするので、ばいきんはアルコールでみんな死んでしまひます。こすつた後の綿がどんなにきたなくなるか、きつとびつくりするでせう。

石膏細工の手入れ

應接間や客間にかざる石膏細工のよごれたのは、こすつたりすると、きずをつけるが、メリケン粉をどろ／＼に水でねりこれをブラシで一様にぬりつけて置き、乾いてから、かわいた柔かいブラシでメリケン粉を拂ひおとしてゆくと、見違へるほどきれいになる。

喜よろこびへの飛躍ひやく

小消息講義せうそくこうぎ（其四）

中 村 辨 康

五種しゆの至難しなんを突破とつぱする喜びよろこ

受けがたき人身にんしんをうけて、あひがたき本願ほんがんにあひて、起しおこがたき道心だうしんをおこして、離れ難はなき輪廻りんねの里さとをはなれて、むまれがたき淨土じやうとに往生わうじやうせんことは、よろこびの中なかのよろこびなり。（和語燈錄）「法語抄四九」

人ひとになり乍なら

均ひとしく生物せいぶつと云つても、草木くさきもあれば動物どうぶつもありますが、人間にんげんなればこそ、ものものを考へたり信仰しんぎやうを語つたりすることが出来ます。

其上そのうへたまにはお芝居しばゐも見たり、笑ひ話わらもしたりします。それは愁かなしいことや苦くるしいことでもあるにはあり

人間にんげんなればこそ

贅澤の限り

ますけれども、人間ならさればなし得ない数多い色々な事のあるのを考へますと、何んなに苦しい境遇に居る人でも、まさかに虫けらや牛や馬になりたいとは考へないでせう。

須彌山と云ふと、つもない高い山の上から糸をたらして、深い深い海の底に沈んで居る縫針のメドを探しあてゝ、それに糸を通し、ソロソロと山の頂上まで引き上げる事は、むしろ出来ない相談の話でありますが、人間に生れるのは、それよりも尙ほ一層困難であり、極めて稀れな事であると、昔しお釈迦様がお弟子達に話したことがあるさうですが、本當にさうかも知れません。

何故と云ふに、ドンナに小さい「命」でも命は命ですが、此地球上に存在する数限りもない澤山な微生物から虫や蛇や魚や鳥や獸などに至るまでの「命」の数と、人間の頭数と比べて見たら、ほんとに人間は爪の汚ほどにしか當らないからです。

つまらないことのやうですが、こんな事を思ふと、私達が退屈したり不安不足を云つたりして居るのは、誠に贅澤な限りで、何て云ふ耻知らずだらうと、反省せずには居れなくなります。

ほんとに人間に生れて來たのは有り難い事です。

人間なればこそ日々新らたに進展し行く文化の恩澤にも浴し得るのですが、それを贅澤千萬にも、すべつたのころんだのと些細のことにまで、不平をこぼして、お互に血眼になつて慾の皮をつつばらかし合つて居るのです。さうして、要するに一日一日をすごして地獄へ地獄へといそいで居るのです。

此のまゝですと人生は全く夢にも均しいものです。

何時の間にか五十になり七十になりして、アツと云ふ間際までウカウカ、ウロウロ暮して居る始末です。人事ではありません。私自身の事です。

本當に人生の尊さを知らずに居る淺間しさです。

理 千古不變の原

宗教の極致

イヤ、多少知つては居るつもりですが、ツイ忘れてしまつて居るのです。少しでも氣に喰ないことがあるとすぐ向つ腹を立てたり、悲しい事件にぶつつかるともう苦しみ藻掻いたりして、本當の人生をスツカリ忘れ切つて居るのです。全く申し譯のない事です。かくの如くして、墓場に行つて仕舞ふのかと思へば、私と云ふ一個の人間は、折角人間に生れ乍らあたら一生を臺なしにしてしまふ譯です。

本願に遇ひ乍ら

何んな未開の國でも人間のある限り宗教のない國はありません。

それは人間が幸福を望んで居るからです。

そして色々な問題にふれて、幾千年幾萬年もかゝつて幸福を求めたけれども、結局「無我」の考へから、人間生活の建直しをしなければ駄目だと云ふ結論に達したのでした。そしてそれが、釋尊の佛教だつたのです。

之は現在に於てもヤレ統制主義のヤレ全體主義のと騒がれて居るやうに、千古萬古かはることのない最高の眞理なので、問題として色々な云はれて居ることも、畢竟それへの過程に過ぎないものだと思ひます。さて、此の佛教の中でも「本願」を中心とする教へは、非常に高遠な理論を追ひつめ追ひつめして行つた結果、單に理智の上の満足のみでなく、人格的に具體的に、人間の根底に居据つて居る情意までも納得させる爲めに最も純粹な信仰として、然かも佛教の求めた最高の原理へ端的に直參せしめるものでありますから、ヤレ眞如だのヤレ法性だのと、小むづかしい事をひねくり廻さなくとも直ちに目的に到達し得るものです。ですから今私達が此の本願を中心とする教、即ち淨土教に遇ひ得たことは、本當に幸せだと

求道心の不足

云つてよいと存じます。

數限りもない有らゆる生物の中から、人間として生れ、其人間の中から選みに選まれて、古來幾多の深い研究と體驗とに依て追求し得た宗教のエッセンスたる「本願」の謂れを聞き得たのですから、本當に悦びの中の悦びだと喜んでよいのではないでせうか。

然るに折角此の「本願」に遇ひ乍ら、ホレボレと満足な念佛一つ出来ないといふ不甲斐なさは、一體全體何うした事でせう。實に情けないではありませんか。

それは本氣になつて求めて居ないからです。眞實を求める氣持が足りないからです。純眞な氣持が薄らいで横着な根性が強くなつて居るからです。

私自身を靜かに反省して見ますと、之でも昔は随分純なものだつたのですが、段々利己主義が強くなつて、心もねぢけ氣も荒んで、古い歌のやうに

世の中は何の絲瓜と思へどもブラリとばかりしても居られず

ぐらゐにしか考へないやうになり、段々横着の修養ばかりして遂に、いけなくなつてしまつたのです。それと云ふのも「道心」が足りないからです。

イヤ、實はまだ本當の強い「道心」が起きて居ないのかも知れません。

道心を起し乍ら

求め行くこゝろ

「道心」と云ふのは「菩提心」とも云ひますから、何だかむつかしい「心」のやうですが、實は皆な持合せて居る筈のものです。例へば見供が根堀り葉堀りものを聞きたがる氣持の如きも、やはり「道心」の原始的な一つで、一般的に云ふなら「向上心」のこと、よりよきを求め行く心のことです。

未會有のこと

之をつきつめて行けほ「めざめ」の完成者たる「佛」を求め行く心ばえなのですから、人間である限り、多いか少ないか、皆な持合せて居る筈です。

「研究心」と云ふのも其過程の上に現はれる心です。

電気なら電気のことばかり研究して行くのを、俗に「研究家」と云つて居ますが、その研究心を自分と云ふ一個の人の中に、最高最上の人格を見出すべく、修養し追求して行くのが佛教に云ふ「道心」なのですから、氣持其ものに於てはやはり同型であり全く變つた性質のものではありませんまい。

して見れば、私達も信仰に依て「阿彌陀」を求め「淨土」を求めつゝある此心が即ち「道心」なのでチツトモむつかしいものではありません。

然しよく考へると、不思議にもかうして道を求める氣持になつたことは、實に稀れな事で、二十億も居る人間の中に、何れだけの數があるでせうか。世界人類の何割かの日本人の中の其また何割かが佛教信奉者で其約半分が淨土教關係の人達で、其また何割か念佛する人で、其また何割か現に信仰を求めつゝある人だとすれば、實に寥寥たるもので、極めて稀れだと云ふ事になりますから、此意味からでも私達は大いに喜んでよい譯です。誠に選ばれたる中の選ばれたるものと云はねばなりません。

御經の中に「光明遍照十方世界」と云ふ文句があります。

つまり如來様の光明は誰彼の差別もなく、天地一切を包んで照らして居るのですが、「念佛衆生攝取不捨」と云はれるやうに、特に念佛する人のみを選んで捨てないと云はれて居るだけでも「選ばれたる者」と喜んでよいでせう。

兎にも角にも念佛の信仰を求めて居る私達としては、稀れな人々の仲間入りをして居り、かすか乍らとは云へ、極めて稀れた道心者の一人として、如來の光明の中に攝取されて居るのですから、もつと本氣に

住めば都

難關の突破

なつて念佛にいらしてしんでもよい筈ですが、何うも人間の出来が悪くルーズに作り上げられて居ると見えて、中々眞剣な求道者にはなりかねて居る現状なのです。イヤ、出来が悪いからこそ道を求めて居るのです。それなのにまだ本當に深刻な反省が起らないのです。そして「輪廻の里」を離れるのを嫌つて居るのです。

離れ難い輪廻の里

自分の日常を反省すると、本當に離れともないのが此の「里」らしいです。

「住めば都」と云つて赤ん坊時代から馴染んで居る此里です。

ですから何だ彼だと不平は云つて居るものの、離れともないですね。

然し、其處に誤解して居るものがあるではないでせうか。

輪廻の里を離れると云ふことを、何だか持つても居ない「財産」を捨て、心残りし乍らもルンペンにな

り下るやうに感じては居ないでせうか。

尤もです。法然上人でさへ「離れ難い輪廻の里」と云つて居られるのですから、やはり初めの内は離れ

難い氣持がして居られたに相違ありません。でなければこんなことを云はれる譯がないからです。

然かも五つの難關の中でも之を第四番目に置かれて居るのは、一番困難な關所だからでせう。

此難關さへ突破すれば、あとは大した問題ではありません。だから飛躍です。

此の飛躍が出来ればもう一切問題なしで行けさうです。

つまりは「無我」への飛躍だからです。

聖道門の教だつて此處が一番急所ではないですか。

死しない生命せいめい

今の處、私達に取つては「肉體の生死」が重大問題ですが、此飛躍が出来れば、そんな問題は尻の河童です。シツカリ「永遠の生命」が獲得されるからです。

昔し韋提希夫人と云ふ可弱い女性でさへ、無生忍を得たと云ふではありませんか。

「無生忍」とは永遠の生命を認めたことです。肉體だけの生死を本當の生死と認めず、本當に生き通しに生きられる確信を得たことです。

グルグル廻りして居る「輪廻」の生活から飛躍して明るい世界へ轉進すること、それが「無生忍」であり「往生」である譯ですが、唯だ現在の「往生」を區別して「無生忍」と云つた迄だと思ひます。

一體「輪廻の里」と云ふのは、我を立てる生活のことで、「我」を立てゝ居るからこそ、社會との摩擦が多く、事毎に問題を起して、グルグル一つ處を廻つて居るのです。

恰度蛇が自分の尻尾を吞んでグルグル廻りして居るやうに、何處まで行つても解決はつきません。然し何も無解決の世界に迂路迂路して居る事はないでせう。

本當は飛躍の出来るものなら飛躍をしたいのですが、その飛躍が出来ずに居るまでのことかも知れぬ。では何うすればよいでせうか。

法然上人の御信仰に依れば何でもありません。念佛する丈です。

本願を信じて念佛するだけです。念佛の聲を自分の耳にきかせて、私達の心を如來の方へだんだん馴致して行くだけです。さうすれば何時か知ら心が轉廻して信心發得が出来る筈です。

然し私達には自分がよく判りません。自分が急轉廻する性か、或はまた緩慢に大旋回する性か判つて居ないので。凡ては如來様の方で適當にやつて呉れるでせう。

汽船の火夫や水夫は船の進路を手ん手に考へなくともよいのです。機關長が適當に進めて呉れるでせう。

法はふ飛躍への最良

一切を如來に
まかせ切る

本當の喜び

悦びの中の悦び

一切をまかせ切る生活。

立派な藝術家が自分の作品に魂を打込んで、世の毀譽褒貶を外に、藝術其ものに一切をまかせ切つた生活をして居るやうに、私達も自分の身體の中に如來様を勧請して、一切をまかすことが出来れば、生れ乍らにして既に淨土往生の人でありませう。羨ましいではないですか。

私達にはまだまかせ切れない處があるのは恨みですが、そこが輪廻を離れて居ない證據でせう。然し外に方法はないのですから、それも如來様にまかせて置くがよいと思ひます。

念佛さへして居れば、そして求道心の火さへだんだんもやして居れば、私達と云へども適當に育つて行くでせう。

念佛の中に、安らかにそして朗らかにそして眞剣に、それぞれの與へられた職業に努力し得られる生活さへあれば、外に文句はないぢやありませんか。

感能的な喜び。それは本當の喜びではありません。

經濟の豊富。それも本當の喜びを得させては呉れますまい。

社會的な地位。それも本當の喜びとは云へません。

唯だ永遠に亡びない自分、苦惱なき生活、自ら省みてほゝ笑まれる家庭、親切をし合つて行く周圍、それがあれば、私達の世界は何んなに幸せでせう。それは獨り信仰に依てのみ得られる世界です。

この故に信仰に依て自分と周圍とを清め合つて行く生活こそ、本當に悦びの中の悦びではないでせうか。

鑽仰運動ニユース

鑽仰の大旆の下に

共に躍進しよう！

血盟式満二年を迎へて

祖廟の松籙の下に森嚴な發會の血盟式を擧げたのは昭和十年の四月十一日であつた。それから正に二年の年月は流れた。祖廟に心から誓約した事は次々に實現され、會は一日一日と躍進の道を歩いて今日に至つた。發展の二年間ではあつた。今、本會のこの盛大を見て祖廟下の血盟式を思ひ浮べ、法悦の感涙にむせぶ者は、豈記者のみではないであらう。あの時の感激を思ふと、今立たざるは淨土教徒でないとの確信が蘇つて来る。既に本會は堂々たる内容を具備したとは云へ、廣く一般社會に對する時、未だ寥々たる存在に過

ぎない。未信の大家が如何に多く路傍に彷徨へる事か。それ等の大衆を獲得してこそ始めて我等は大願を誓つた祖廟に心から頌き得ると云ふものだ。これ迄の躍進は未だ一段階に過ぎない。更に我等は法然鑽仰の大旆の下に前進しなければならぬ。一萬五千の同志よ、我等は共に鑽仰の一兵卒として未信の大家獲得運動に邁進しよう。一人が一人を獲得すれば三萬、二人を得れば四萬五千。それだけ我等の燈、法然上人は現代に生きて来るのだ。共に進もう！共に躍進しよう！鑽仰の大旆の下に。

木更津の講演會

佐藤賢順先生出講

既報の如く發會式を擧げた千葉縣の木更津支部（主任山本綠瑞氏）では四月十四日、同町の佛教會と聯合して佛敎講演會を開いたが、程ど萬端を同支部が司り、會場も山本氏の住職寺選擇寺で講師も本會の佐藤賢順主事

本部より講師を招いて

明照支部の大會

越後路に法燈燦たり

新潟縣小千谷町の明照寺では本會創立早々に明照支部（主任廣島教信氏）を結成して、會員も二十餘名に上り毎月二十五日には御忌講を勤修して信仰の向上に精進してゐたが、今回特に支部擴大を圖る爲に本部に講師派遣方を依頼した。本部では早速講師として大橋俊孝氏を派遣する事に決定したが、何時日は四月二十四日、二十五日の兩日に確定し、二十四日には支部大會、二十五日には御忌

を煩した。聴衆は約五十名で、熱心に佐藤氏の講演を聞いたが同町には珍らしい生氣溢れた佛敎講演會であつた。尚同木更津支部では五十餘名の多數の支部員がある處から、今後とも各種の催しを開いて會員の修養に力を注ぎんと、意氣頗る壯んである。今後の活躍が各方面から切に待望されてゐるのも當然である。

鹿兒島支部

鹿兒島支部は從來再三報じた如く會員二百名を突破して、全國第一の大支部として誇つてゐるが、今日尙刻々増加の形勢である。主任小橋瑞瑞氏の絶えざる奮闘によるものであるが、例會も毎月缺かした事はない程の精勤ぶりである

維持の赤誠溢れ

東京寺院續々と

維持會に入會す

各部を單位として

本會は創立以來、總べての點に於て犠牲的活動に終始して來た。

財をなげうつ人、勞力を奉仕する人が眞摯に一團となつて、法然上人の旗の下に苦難の道を戰つて來た。今日の盛大が齎らされたのも、この精神があればこそである。京都大阪の寺院の御援助が空前絶後と云はれる程の眞剣さであつたのも、この

有力な一例であるが、この精神は今尙燃え續け、東京では續々と維持會員が増加して行く。先月の状況では既に個人参加の口数は百に上り、それに加へて、城南組の三田部、田町部、西久部、北部組等は、一ヶ寺残らず舉つて團體

参加せられ、而も參務が責任を以て集金せられると云ふ眞剣さである。尙この他に淺草組も近日各部毎に纏めて参加せられる筈で、續いて他の組も一ヶ寺残らず維持の赤誠を示される事になつてゐる。恐らく驚く程の口數に上る事と思はれるが、宗門の事業としてこれ程の眞面目な

後援を受けた事は未曾有で、如何に本會の事業が宗門にとつて不可決のものであり、待望されてゐたものであるかを雄辯に語つてゐる。一般會員諸賢もこの赤誠を生かす爲に、出來るだけ會員を獲得されて、本會の發展に資せられん事を切望する。

貞恭支部の例会

貞恭支部は東京の婦人中心の支部で、本會の佐藤賢順主事が専ら指導してゐるが、毎月必ず例回を開き、佐藤氏を始め諸名士の講話を聞き、堅實な修養の道に、いそしんでゐるが、今回は特に印度で苦熱と戦ひながらムーラガンダ寺の大壁畫を完成して最近歸朝された野生司畫伯を四月十七日午後二時より芝の明照會館に招いて、その苦闘談を聞いた。約三十名の會員が參集したが、野生司畫伯の身命を賭した大聖業の體驗談は深い感銘を與へて思はず襟を正さしめた。

「會員の聲」をお送り下さい

本會對する希望、「淨土」の編輯に關する注文、其他各部面への欺らざる批評を御遠慮なく御投稿下さい。

會員の聲

▼毎月「淨土」を楽しく讀ませて頂いてゐる者です。中村先生の法語講話、大野先生の聖典講義、共に平易にして而も淨土法門の深い内容を余す處なく説かれる健筆は、私の心を佛の許へ導ひてくれます。又月々の興味讀物も何かしら心の糧を與えてくれる物許りで、「淨土」ならでは求め得られませんか。編輯部諸氏の頭の下さが光つて見えます。今後とも御健闘を祈ります。(福井・田中光雄)

▼信仰相談を利用せらるる讀者諸君。種々の問を毎號見てゐると中村氏の名答により得る所が多い。中村氏をして名答を出さんとせば良き質問を必要とする。質問者中僧侶の方が多々あるが、この欄は果して僧侶の方々に與へられたる獨占物だらうか。難解な質問(少くとも在俗の私共にとつて)に、難解な答が載せられる。これは僧侶方は興味を以て見られるかも知れないが、私共には直接關係のない事もある。若しも本誌が僧侶方の雜誌であらば云ふことはないが、信仰を圖つて讀んでゐる私共も、讀者の一人であり、各支部主任に指導されつゝあるものは獨家である。これを考へて頂きたい。僧侶方は敢て本欄を使用せずとも先輩に解答を求め、研學に依つて明らかにされたい。私共が日常生活に追はれ、宗教書をひもとく先輩に求める機会がないから本欄を借用するのであります。若しも僧侶方が御質問にならば、在俗の者も讀ませてやりたいと思はれるものを選んでいただく。即ち質問者その人が吾々の指導的立場に立つていたゞきたいのです。布教方針を質問されるが、それは直接私共に関心はない。本誌を大衆化するのには茲にも一考を拂ふ必要があるのではなからうか。(失名氏)

▼「淨土」が益々發展してゆくのを心から喜んでゐます。特に四月號から色紙を用ひたのは清新で、而も大衆性を一層加へた感じがします。(東京・笹川生)

編輯後記

◇花もまたよく間に散つて、もう初夏の訪れです。思出多い五月號の編輯です。と云ふのは、一昨年の本誌創刊號が五月、丁度、櫻の眞盛りの時に、呱呱の聲を上げたからです。既に二十五號、早いと云へば早い、長いと云へば長い二ヶ年でした。思へば讀者の支持は偉大なものであります。

◇本誌の特輯は「達人に道を聞く」何事によらず堂に入つて得たる體驗の尊さ、それは一つの悟道です。この境地に就いて知るは必ずや處世上、信仰上に得るところ甚大なるを思ふて、今後、この種のもを更に多く載せて行き度いと思ひます。讀者に於いても、本誌の計畫に御援助下され、御紹介下さらんことを御願します。

◇「甦へる死刑囚」は檀林館林善導寺石井英亮師が化導に御活躍

境悦法の覺味



ドーヨ然天性機有

ヨードの素は

天然に多量のヨードを含み有害なノリ分がなく湯水に良く溶けます

用ひ度い方

肥り過ぎ、高血壓、お産前後の奥様方、顔色の良くない方、風を引き易いお方

進サンフル

大日本水産工業株式會社

卓效薬
ブレインは
血液を清淨にし骨格と神経を強化する強力ヨード有機性剤
効能
動脈硬化、中風、腺病、授乳婦の機カルシウム不足



中の體驗談です。興味の中に信仰の力を味はしめるものです。講談は桃川若燕師が特に本誌のために寄せられたもの、本誌としては始めてのもです。

◇小説の飯田光明氏は關西地方の新進作家。堂本印象氏門下の逸足西田惠泉氏の新味ある挿繪と共になほ二回に渉つて掲載される筈、御愛讀を願ひます。

◇本誌は原稿編輯し、中野善英師始め多數の方の原稿を次號に廻すの止むなきに致り申譯なく存じます。

◇御存知の如く印刷諸材料高騰のため、色々な困難が生じてをりますが、一路發展の途を辿りつゝある本誌は、會員讀者諸賢との御協力によつて、更に一層の躍進を期してをります。

浄土 五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和三年四月二十日印刷納本
昭和三年五月一日發行

(定價金十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町二ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社
發行所 法然上人續仰會
東京市芝區芝公園副都廳會館内
振替 東京八二一八七番

「浄土」購讀規定

一部 定價 金十錢

(送料一錢)

一ヶ年 金一圓

(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。入會御申込みと同時に一圓御收めになれば「浄土」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

中里介山著

法然上人傳

三六版二五〇頁
九ボラルビ付
美麗クロース装
定價六十錢
(送料六錢)

法然上人を知ること、これは日本人として最大の常識である！

著者の言葉から

法然上人傳の權威は何んと云つても「勅修御傳」である。「勅修御傳」即ち「法然上人行狀繪圖」は伏見天皇、後伏見天皇、後二條天皇の三帝が法然の遺徳を深く敬信なされてゐたが、その時分は異教の手あひが争ひ起つて妄りに法然の傳記を作るに至つたので、正統の深くこれを憂ひ、天子にも御心を惱ませられた結果、後伏見上皇の勅により叡山功德院の舜昌法師が近代杜撰の著作を捨て、信用すべき實録をとつて收め、(中略)十四年を経てこの行を了へたものである。(中略)それ等を要譯してこの雅文の典籍を比較的安易に讀ましむることは現代人に對する一つの親切であると思ひて、敢てこれを爲して本書を作つた僭越の罪を許されたい。

古文豪の通俗化！

發賣所

法然上人鑽仰會

芝區芝公園十五號地
振替東京八二一八七

◇ 社友の人隣 所行發 ◇

好評嘖々たる高級布教用書！

中村辨康著

講話 一枚起請文

法然上人の「一枚起請文」が浄土宗教義の精

髓を盡したものであるのは今更多言を要しませ

ぬ。この簡潔流麗な御一文の中に籠る本當の信

仰精神を著者の豊富な體驗と該博な智識に基い

て、易しく詳はしく説いたもので、これによつ

て毎日皆様がお讀みになる「一枚起請文」の正

しい意味が、生活に則して、はつきりと解りま

す。目下非常な好評で、寺院、諸團體から布教

用、教化用として多數の注文に接しております。

多部數購入者への特典

團體、個人を問はず本書を一時に十部以上御購入御希望の向には一割引（九錢）とし、送料は當方にて負擔します。但し代金引換郵便はお斷り申します。切手代用は一割増しに願ひます。

發行所

法然上人鑽仰會

四六版・七〇頁
誰にも讀める總振假名付
二色刷美麗表紙
定價 十 錢（送料三錢）

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十二年四月廿日印刷納本 昭和十二年五月一日發行

浄土 第三卷 第五號 定價金十錢（送料一錢）